

勝 諺藏著作

演 脚
劇 本

宇都宮株木建設

自二幕目
至大詰 七幕

脚本 宇都宮株木建設

場 割

特 51

657

二 幕 目

〔駿河大納言勘氣の場〕

三 幕 目

〔武州戸田川堤雨申別の場〕

四 幕 目

〔清瀧觀世音開帳の場
本多歸國密談の場〕

五 幕 目

〔大工棟梁勘太夫内の場
河村勘大工餐應の場〕

六 幕 目

〔新御殿作事小家の場
城内不淨門夜抜の場
越谷村名主藤左衛門邸の場
柳の井戸大工斬捨の場〕

七 幕 目

〔日光街道の場
石橋宿本陣玄關先の場
同庭先の場
栗橋諏訪の森の場
桔梗門の場〕

大

詰

〔宇都宮入口駕籠内の場
新御殿釣天井の場〕



演劇 宇都宮株木建設

二幕目

役人替名

- | | | | |
|----------|----------|---|---|
| 一二代將軍秀忠公 | 一關 | 物 | 彌 |
| 一坪内河内守 | 一駿河大納言忠長 | | |
| 一畑田主膳 | 一小笠原山城守 | | |
| 一竹本主水正 | 一稻垣主馬 | | |
| 一小笠原若狭守 | 一平岩主計頭 | | |
| 一高木伊勢守 | 一大久保彦左衛門 | | |
| 一松平三十郎 | | | |

駿河大納言勘氣の場

本舞臺上段の間見附金襴前側御簾を下り襦袢間下手金襴を漏斗に飾り膝隠し襦袢間戸家口
 金襴舞臺花道共薄縁都て柳營御座の間の模様琴唄にて幕明く

坪内河内守竹本主水正高木伊勢守畑田主膳小笠原若狭守松平三十郎住居て坪内如何に各

此程より大御所様には御不例に依て畑田「諸寺諸山は申に及ばず筑波山王八幡の宮竹本天海
 師にも御平癒の祈念をなせば追附御本腹はムらうおれ共小笠原御本丸様は御心痛にて御
 見舞の御上使引も切す高木併しながら御臥戸にて御目見得を願へども松平奥醫師の外お目
 見得叶はず坪「實に心配な皆々」義でムる「ト向ふより關惣彌出て來り」關「ハア、お傍衆へ
 申入升坪何事でムる關「只今御本丸様より御病氣御見舞の御上使として若御年寄小笠原
 山城守殿お上りでムり升る「ト引返してこ入る戸家の内にて」○「小笠原山城守殿お上り」
 ト向ふより山城守出て來りツカ〜と舞臺上手へ通り住居」山城守「大御所様御見舞の台命
 を蒙り登營致したり執達の義を頼入る坪「ハア、是はお役目御苦勞千萬去りながら御目見
 得御執持の義は叶ひ升せぬ畑夫と申すも此程よりお傍衆は安藤左京亮只一人其餘の者は
 叶ひ申さず大奥の御對面も許し給はず長井典藥の申すには達て願ふは御病氣の障りとの事
 夫故台命の趣きは左京を以て傳達の仕れば此義御承知下さる様六人願ひ奉る山「ソレ夫は
 關老よりの指圖でムるか坪「アイヤ御直の嚴命でムる山「ム、御直のお詞とあれば力なし
 竹「諸典藥は御座の間の次へ詰切り左京御守護申上かり升れば小時々刻々に御容態御知
 らせ申上るでムり升せう山「夫承つて拙者も安堵坪何分よしなに言上の義六人願ひ奉る
 山「如何にも承知致してムる「ト山城守向ふへと入る向ふより關惣彌出て來り」關「お傍衆

へ申入升只今駿河大納言様お上りでムリ升る「ト引返してと入る向ふより駿河大納言忠長平岩主計頭附添出て来る」平「北の丸様には能こそお上り六人先々忠長免るせ六人ハア、ト舞臺へ來り」忠「父上の御不例予も心痛の餘り御見舞且はお願ひの筋あれば此義言上致してくりやれ拜」ハア、其義に附升て平「アイヤ其義は只今鷹の間お廊下にて小笠原山城殿より承はつてムる」忠「假令父上御病中たりとも取次の出來ざる事はあるまい六人ハツ」忠「主計彼等は何役を勤むるぞ」平「ハア、お傍御用の取次でムリ升る」忠「去る役目を蒙りながら取次事は出來ざるか六人ハツ」ハア、お傍御用の取次でムリ升るが」忠「取次事のならざれば直々御病室へ參るである主計參れ」平「ハア、御意にはムリ升れど御座の間御見切口にムリ升れば拙者は是にて忠」さうの○案内致せ六人ハツ」忠「エ、致せと申に」ト是にて藤を捲上る内は秀忠公安藤左京の肩に倚り立身にて居る皆々ハア、秀忠國參りしか」忠「ハア、父君の御不例心痛の餘り御見舞として上りし所料らす御目見得仕り忠長恐悦に存じ奉る」ト此内忠長褥の上に住居」秀「ヲ、予も満足に思ふぞよ」忠「ハア、秀忠國よ進め」忠「ハア、」ト二重に住居秀「一人に面を合すさへ慵く思ひ人の出入を禁じかりしが今日は氣分宜く歩行を試む折柄に其方に對顔致せしか幾か見ぬ間に人になつたなア」忠「ハア、是と申も父君の蔭二つには臣下の者共が忠義に因てムリ升る秀「ヲ、末頼母しき其一言夫に附て其方に申聞け置く事

あり○抑父君には元龜天正の頃より御心勞の甲斐あつて天下は則徳川に歸せしが元和二年終に神隱れあられ今家光にて三代の相續治世とはいへ東西の諸侯には皆戰場まで生殘りの者斗り我死しての後若し天下に變あらば家光を相助け神君より預りたる徳川の威を輝すを孝の第一と心得よ」忠「夫は仰せ迄も候はず萬一天下に凶事もムれば我將軍に成替り必らず天下靜謐を謀るでムリ升る秀「夫にて予も安堵致した」忠「夫に附き父君へ此忠長が一生の願ひ懨れお聞濟の程偏へに願ひ奉る秀「其方が願とは如何の義じや」忠「ハア、他聞を憚る義にムリ升れば秀「何かは存せね共他聞を憚る義とあれば暫時立て」皆々ハア、」ト平岩は忠長にこかしあつて下手へは入る左京立上るを」秀「アイヤ待て」左「ハア、秀「國よ彼と對馬が嫡子にて予か看護を致す者苦しうあるまい」忠「ハア、秀「シテ願ひの筋は如何なる義じや」忠「ハア、其お願ひと申は是なる一書秀「何一書に認めあると申か」忠「ハア、○ト懷中より願書を出し」則是に」ト秀忠受取見て」秀「コリヤ忠長願ひと申は是なるか」忠「何卒父の御仁恵を以升て秀「あの愛な不所存者めが御が密愛に附上り反逆に等しき其方が望み親子の縁も是限り目通り叶はぬ立て」左「アイヤ夫は餘りの御短慮何卒お心を和らげられ秀「エ、其方の存せぬ事じや」ト立上りひよる」トとして左京の肩に手を掛け奥へと入る」忠「我嫡子に生れながら妾腹竹千代の臣下同様老臣共と協議をし今日お目見得

を幸ひに願ひし事も空頼み却つて父の御不興を蒙りし上からは御意の下らぬ其内に此場を去らず生害なさん〔ト下手より平岩様子を窺ひ居て出て來り〕平岩「アイヤそりや御短慮にムリ升る忠、其方は主計平、只今の荒増お襖越しに承り驚入り奉り升る忠、本多を始め其方迄配慮致しくれしかば最早是迄と思ひくれよ平、ハア、仰せ筋尤にはムリ升れど短慮功をなさずの譬へ御一命だに是あらば元より御愛子の事なれば時節を待つてお望みの叶はぬ事もムリ升まい忠、アイヤ其方が諫言なれど諸大名へ對しても平、サ、大行は細瑾を顧みずとは爰の事先々お止り下さり升せう〔ト上手より坪内竹本出て來り〕坪、竹、御上意でムリ升る忠、平、ハア、坪、忠長事身分を顧みざる事不届又思召され駿遠參の百五十万石を召上切腹をも申附べきの所御臺を始め諸侯一同の歎訴に因て安藤左京亮方へ永の預け申附べき事に附家老本多上野介平石主計頭鳥居左京亮其他殘らず召上げ御家人たるべき事北の丸を始め七屋敷共三日の間に引取り申すべき事忠長上州へ出立迄ハ酒井左衛門尉方にて急度謹慎致すべき事上意の趣斯の次第忠、ハア、忠長承知仕ると父上へ言上致せ坪、御承知の上からと役目の表イヤ御下城坪、竹、遊ばされ升せう忠、予の爲多くの者の心勞免しくれよ坪、ハア、勿体なき其仰せ其内吉左右の御上使あるは必定されは竹、坪、少しも早く御下城遊ばされ升せう〔ト言捨てと入る〕平、此上長居と君への恐れお供致すでムリ升せう忠、イ

ヤ主計其方今より直參の諸侯罪極まりし予が供を致させては相濟まぬぞ平、ハア、斯る伶俐の君なるよお痛としや此有様忠、イヤ何も申すな予が不徳より起りし事○コリヤ主計父が御座所も是が見納め平、ハア、忠、主計參れ平、ハア、〔ト花道へ行く後ろの襖を明け奥庭の境見にあり爰に秀忠居て秀忠待てく忠、ハア、秀、面を上げい忠、ハア、秀、ア、胸苦しいわい忠、御尊躰を大切に秀、チ、行け○行けと申に忠、ハア、〔ト忠長平岩向ふへと入る下手より大久保彦左衛門出て來り大久保君是にお渡りかか秀、チ、彦左衛門か何用あつて參つた大、イヤ何用でもムらぬ御臺所を始めとしてお詫び申せどお聞入なく是迄誤つた事のない此親仁が天窓を下げてお詫び申に君には目の中へこ入ても痛くない御愛子でありながら如何に御意に入らぬ事があれば忠忠長公を罪人同様の被成方は秀、イヤ其詫なれば捨置けく大、イヤ此彦左承知は相成らぬ抑神君御入國以來四海太平を唱へおるに我子たりとも自儘に封祿を召上げてハ終には御親子の間に騒乱を醸すの基ひサア駿河殿の御勘氣御免の御沙汰ある迄爰一寸も動きや仕らぬ秀、其方の詞尤あれど此義斗りは了簡罷成らぬ大、罷成らねば成らぬで宜しい罪の次第を承はらう秀、サア其義は、大、然らば勘氣御免あるか秀、大、サアくく大、如何でムる秀、ム、別人ならぬ其方故申聞ける承はれ大、承らいで何と致さう秀、予が心中斯様じやない〔ト叫く〕大、何忠長公には天下を

分ち西國三十三箇國を司とらんと願ひとな紛ふ方なき反逆人流石は明君愛ふ溺れず能くも御勘氣遊ばした 秀實に神君か目鏡を過らす國松を乗給ひ 大竹千代君を三代の主とせしは御當家の 秀萬代不易の吉兆か彦左 大ハア、秀實に三代は〇ト胸息を置替へるが木の頭」大切じやのう、ト此仕組宜く詔らへの鳴物にて拍子幕

三幕目

役 人 替 名

- 一本田上野介正純 一船頭源兵衛
- 一駿河大納言忠長 一同九助
- 一安藤左京亮重長 供廻惣出
- 一目附松平十郎 近習六人
- 一同永井徳之助 竹本連中
- 一渡守權藏

武州戸田川堤雨中別の場

本舞臺通り高二重二はい飾を喰違ひに飾り前の二重下手土手の上り口接欄伏せの蹴込み柳の立樹渡し小家戸田川渡し場の傍示杭向ふ川を隔て、在を見たる雨夜の遠見松の釣枝上下

大竹敷都て武州戸田川渡し口の体本雨床の淨るりにて幕明く

淨るり降り頻る雨は綾なし秋の夜の月折々に見へながら晴れ間は更に長駈往來も絶へし戸田川の浪轟いて岸を打つ音に聞へし海道も人跡絶へて物淋し〇千種にすたく蟲の音を歩む程づゝ止めしは何れの藩の侍二人しとくと駈來り〇コリヤ渡し守はるか〇、今起きよ

く 淨碎る斗り打叩けば内には寢惚えしはがれ聲傳蔵御用の外は五つ限り夜渡しならぬのだ 〇「龜相申すな然も公儀の御用あるぞ 〇、△「明るく 〇「御用なら問屋場から案内があるわい 〇「ト戸を明ける問屋裏の傍は源兵衛九助寢て居る權藏向人を見て「チ、お武家様でムリ升るか 〇如何にも我々事は上州高崎の城主安藤對馬守様の家來 △「今晚公儀の御用に因て若殿左京亮様俄かの御歸國 〇、△「早々船の用意を致せ 〇「モシ高崎様の御通行から前以て問屋場から達しがなければならぬ筈 △「其不審は尤なれ共子細わつてお忍びにて火急の御歸國上の御用を妨げなば後日のお咎め輕からぬぞ 〇ソレ最早御同勢が夫へ參れた 〇、△「早く致せく 〇「成程高崎様だく 〇源兵衛九助起るく 〇「御用だく 〇「淨

狼狽廻る其内に早近附し先供より續く一駕の乗物は如何なる罪の囚人か綱の目繫に取巻し近習が鵜の目高張の提灯輝く紋所は海道に名も高崎の城主安藤對馬が嫡子左京亮を始めとして公儀の目附諸役人列を正して來りしは忍びながらも嚴めしく 〇「御両所渡し船の御用

意は四人調ひ升たか。只今申附かる所でゐる。早く致さぬか殿にの最早お越しなるぞ
源兵衛、何だ御用だ馬鹿をぬかせ九助、酒屋の御用も来るも
のか。源、ヤイ、く、厭つて目を明ける。源、籠棒め生れた時から目は二つ。〇、ト、いひなが
ら同勢を見て、「イヨウ、是の狐の嫁入だ。丸、雨の降るのに何したのだ。源、ユレ、静かにしろ高
崎様の若殿だ近習、早く致せ。三人、へい、く、ト、狼狽て籠を取り着ながら二重の後ろへは
入る。△、若殿にはイザか船へ近習、か召使遊升せう。左、イザか目附方より十、惣、先々、左、ソ
レ乗物を皆、ハア、源、せき立つ時しも向ふより、ト、向ふにて、上野之助、アイヤか乗物暫く
く、く、源、聲を限りに笠深く面も向けず馳來る侍、暫くお侍被下升せう。源、と大地に
両手を付き、く、には夫と見るより聲高らの十郎、ヤア安藤殿を始めとして公儀よりの命を蒙
り、徳之助、夜中ながら高崎迄守護なし參る乗物を、左、待と留めし其方は皆々、何者なるぞ、ト
此時遠見に月を出す。上、自分義は野州宇都宮の城主本多上野介正純にムリ升る。左、其本多
殿が従者も連れず御一人、十、駈附られしは心得ず。徳、正純殿三人、何事でゐるぞ。上、其御不
審は御尤承れば忠長公には大御所の御不興蒙り國郡御館は召上られ自分を始め附人たる者
將軍家へ引戻され忠長公には安藤氏にお預けと聞に附けても餘り俄かのお身の成行せめて
長のお別れは御尊顏の拜し度く駈參つたる本多上野怒れお免し下さる様安藤殿迄お願ひ申

す。源、思ひ入てぞ逃ければ左京亮しとやかに。左、スリヤ夫儼にわせられしと。上、御幼少
より傳き參らせし君が今日斯なり給ひし本多が胸中を察し下され。左、貴殿の心中を察し申
す如何にも御對面の致されよ。上、スリヤお聞濟下されんと。十、アイヤ本多殿は忠長公の
然も老臣萬一途中に變りし事など出來致せば一大事。徳、路次を守護する公儀の目附我々役
目に關り申せば其義は決して、十、徳、相成申さぬ。源、と拒めば忠長打ち點頭。左、ろと御尤で
はムれ共武士は相身互ひにて役目は役目情は情内々にてのお目通りは若しからずと存じ申
十、デハムれども公儀よりのお咎めあつた。徳、十、其時は、左、若し左様を義もあらむ安藤左
京亮身に引受け一城を差出して切腹致す分の事。源、立派を詞、是非なくも。十、然らば貴殿
の、十、徳、お心任せに。左、イザ宇都宮殿御内々にて。上、御厚志の段添う存じ申す。ト、上野介
舞臺へ來り加賀籠を下手に置此上に大小を置き平伏する此内左京亮は鍵にて乗物の錠を明
け戸を開ける忠長俯向居る。左、ハア、忠長公へ中上げ奉り升るせめては憂が其中の御心遣
りに御對面遊ばされ升せう。忠長、何予に對面致せとは。上、我若、忠、ヤ上野介か。上、ハッ、ハア、
忠、能ど參つてくれたなア。上、君にの不慮の義に因て斯淺き御身の成行か痛しう存じ
升る。源、浮し涙を吞込めば忠長にも聲曇らし。忠、ナ、予が斯くなり果し程なれば其方始め
臣下の者共難義を致しおるならん此忠長が今での後悔免しくれよ。上、コハ勿体なき君のお

詞某不肖の者と雖も神君のお目鏡を以て附家老を命せられ君の御武運長久を祈り去甲斐も情々や何等の故にて大御所の怒りに觸れまものなるか歎はしう存じ升る 左「其許の御愁傷御尤なる君の成行某逆も如何ある科か其趣意更に存せね共上野の宮御三家御家門十八松平の申すに及ばず増正寺の大僧正天海僧止迄手を尽してのお詫びも叶はず網乗物にてお供を致す左京亮さへお痛しく存するものを本多殿の胸中は無かしならん 上「御懇切なる其お詞是も御父秀忠公の上意とわれを止むを得ざれど御連枝にして苟くも大納言の御位よあらせ給ふ御方が網乗物とは何事ぞや夫を思へば胸迫り目にこ涙の溢れ來て御尊顔さへ明かに非し兼たる本多上野左京亮殿御免下され御せき來る涙保ち兼人目も耻す歎きしは理りせめて道理なり忠長公も御目を拭ひ 忠「斯る身と相成りしも皆予が心得違ひより自ら招きし災ひなれば誰を恨まん様もなければ斯迄重き咎めをば蒙らんとお思はさりしぞ家臣多き其中にて汝一人義を重んじ末頼母しき今夜の對面再び逢ふ事叶はねは是今生の訣れと思へよ 上「ハア、愚臣よ於ても後來を料り兼てのお目通り何か仰せ置れ度御存念にても候は、仰附られ下さり升せう 忠「此期に及び申置くべき事はなければ其方が精神を見極めて只一言「トいひ掛けて邊りを見るを「アイヤ左京亮殿雨も纒かに小止の内か急被成て然るべし 徳餘り長く相成ては上への聞へも如何にムれば御斟酌に預りたし夜も闌けたる 十、徳「様子でム

るぞ左「何様餘程闌けたるならん○イヤ何本多殿か名残り容易よ尽き候まじ餘り手間取り此事の大御所へ聞へなば君のお爲も宜まからず最早川を渡すでムらう 上「ハア、其許の御厚情に因らずんば此御對面も叶ふまじ猶此上の願ひには君の行末貴所御親子とお頼み申す 左「其義は氣遣ひ召るゝな何とて鹿略に仕らんや 上「其仰を蒙り安堵致して上野介お別申奉らん 忠「スリヤ其方にはモウ參るか○再び逢見る事叶はぬ其方なりと思ふ程名残り惜さは猶一倍 上「只何事も御時運とお諦め被下升せう 忠「ナ、妾腹の子に生れし家光殿への時めくに予は本腹に生れながら此儘生涯朽果るも皆時節と諦めかるぞよ 上「ハア、其時節とは申ながら御尊顔の是が見納め忠「ナ、○正純進め 上「ハア、 忠「臣たる者は其主の心を受繼ぐを忠とすと 淨「一心籠めてのたまへは 上「お心あり氣を其お詞 忠「予が心を察してくれよト前幕の願書を密かに上野介に渡す 上「ヤ是は 忠「コリヤ乗物やれ皆々「ハア、 淨「君の御説に従者の面々早御立と立騒ぐ中にも安藤左京亮心靜うに「ト上野介は願書を懷中に隠し左京亮は乗物に錠をふるす 十、徳「ソレ急げ 淨「せき立下知に乗物の足並早く堤を下り船場を差して急行く正純邊り見廻して懷中より一書取出し上「何御願之事一攝河泉にて三百萬石遠江を飼馬料をとして十八萬石大阪城を申請けて關西の大名に參動させ天下の政府を二分にち候事○ヤコリヤ是忠長公より大御所へ捧げし願文扱は是故秀忠公の怒りよ觸れ給ひ

しと覺へたり○去るにても只今のか詞は我に代つて此望みを遂げくれよとの心なるべし
 元より御家督に備はるべき君が爲に忠義を尽すは願にして逆ならず迎もあたら天下の主
 じに○イヤ〜此君を御世に出さんと謀る時は當時の君を害し奉らねば相成らず左ある時
 には神君への恐れあり○ア左は去りながら正純を人かましう思召され仰せ置れし此願文反
 古に致すも不忠の至りコリアモウ寧ろ家をも身をも「ト上下竹藪より百姓体に扮装し近習
 六人出て來り六人御前様上」近習の者か「ハッお忍びの途中變事のあらんも料り難くニ」
 百姓体に身を扮し「陰ながら御守護六人仕つてムり升る 上」太義でけつた六人「ソテ我
 君には 上」歸邸の致さん大小持て六人「ハア、」ト上野介大小を帶し花道へ行く又両車にな
 り「我君六人」お笠を 上」又降出せしか「月ありながら六人」秋の癖とて 上」今宵の降雨
 は順て御世知る吉き前兆六人「エ」ト上野介笠を取るのが木の頭「上」イヤ天が下なら降りも
 こそすれ「ト皆々向ふへは入る此模様宜く静なる合方雨車にて拍子幕

四幕目

役人替名

- 一本多上野介正純 一仲間新六
- 一河村鞆負 一同彌助

- 一大工與四郎 一炎賣屋善兵衛
- 一同佐太郎 一長野良助
- 一藤左衛門娘お米 一淵部左司馬
- 一下女お仙 一西川段兵衛
- 一門番甚太兵衛 一服部武太夫
- 一福田有庵 一近習大勢
- 一大工音五郎 一小姓一人
- 一同萬吉

清瀧觀世音開帳の場

本舞臺半舞臺上手掛茶屋開帳の寄進札真中紅葉の林講中の轍清瀧觀世音開帳と記せし家根
 附のまたぎ是は記字の紋附し提灯を掛け都て宇都宮淨土寺開帳の体爰に音五郎萬吉を相手
 に新六彌助喧嘩をして居るを有庵甚太兵衛止めて居る此模様辻打バタ〜よて幕明く
 四人了簡ならねへのだ〜有庵是はしたりお前方 甚太兵衛「部家の者も此甚太兵衛のいふ事
 が聞れずばお係へ届けるぞ有」又おみなさん達も勘太夫さんと呼で來るからさう思ひつしやれ
 音五郎是サ先生棟梁を呼で來られて堪るものう万吉高が此駄折助を叩き殺まやアいのだ

新六「洒落た事をぬかしやアがるなナイ甚太兵衛さん打遣て置ておくんなせへ彌助、天窓の缺と拾はさしやア合點が出来ねへのだ。吾、コレマア待てといふにじたいお前達の何所の者じや。有、イヤ御門番此二人は勘太夫と申大工の子分。吾、夫では出入の大工頭勘太夫の子分の者か。有、其又相手はお上の仲間いはいでも知れた法被のお印。吾、コレ何ういふ事からして此いさかい。有、善い悪いは愚老の見立で仲人のじを持つてではないか。吾、ナ、左様じや假令渡り仲間でも此法被を着て居るから本多上野介様の家來も同然筋道の立た事なら中々おれが合點せぬ其譯をいはんせ。新、何夫は斯いふ譯だ今此内で片足揚げて居た所ッルリどいつて轉んだ半をつい間違へてこいつ等の玉子焼を挟んで來たのだ。吾、夫は貴様が悪いのであいう。彌、だからサ悪くば悪いで誤らす所もあるが天窓のら盗人どぬかされちやアおれが黙つて居られねへから茶碗を叩附けたのだ。吾、夫では重々悪いが。吾、サア夫だから了簡が出来ねへのだ。吾、サア爰へ出やアがれ。新、節棒めうぬ等の方で了簡しても脊中よ脊負たお印が承知しねのだ。吾、吾、何をうぬ。有、マア待なさい今日の所は愚老に任して下さい其代りにこつちも中へ立入たが不肖故一寸一盃買うでないか。吾、さう聞くと甚太兵衛も誠に辛い談しじやが一合買うから了簡をするが宜い。新、酒でも買ふといふのなら。彌、不肖を仕様。有、こなさん達も任すであらうな。吾、サアわつち等こ了簡も仕升せうが。吾、連れの野郎

が了簡を仕升まいよ。有、夫では尙連れがあるのか。吾、へい今飛出して往つたのは。吾、鎗か鐵炮か擲出して來るのだらう。吾、滅相お此御城下で騒がれて堪るものか。有、氣の早い男じやなア。「ト向ふにて」佐太郎、放してくれ。與四郎、是サ待といふに。「ト與四郎道具箱を擔ぎ佐太郎手斧を持與四郎に引張られながら出て來り」佐、與四郎後生だから遣てくれ。與、おれが擔いだ道具箱から其手斧を引纏で駈出すのは喧嘩でもしたのだらうマア夫をこつちへ寄越せ。佐、否だ。放してくれ。○「ト舞臺へ來り」サア此大工の佐太郎が相手だ。與、「エ、困つた奴だ。吾、ナ、與四郎坊か。吾、マア佐太郎を止めてくれ。與、ソレ見ろ音も萬も止めるといふは放しやアがれ。「ト手斧を無理に取る」佐、ヤイ與四郎不斷兄弟だといふ癖に相手の肩持のだな又此化者も腰の利ねへ亡者じやねへか喧嘩をして止めるとは何の事だ。與、「コレ佐太郎おれのいふ事が聞れねへのか。佐、聞れねへのだ。與、聞れざア勝手にしやアがれ。「ト突放す」佐、コリヤ唐茄子め何をしやアがる。有、コレ待なさい連れのこなたが了簡とれば此二人も承知をせぬでもない口ぶりお前も了簡してやらしやれ。與、さういふは福田の先生でムリ升せるの能く扱つておくんなぞつたわつちも今日は半。事、事、事、仕舞つて歸る其途中取ツつかまへて來升たが夫れでは相手も納りたのでムリ升かた。新、納りにくい所だが仲人が御門番あり。彌、酒で扱ふといふことも若いのお前も了簡さつしやい。佐、ろりやア好

き好んでする譯じやアねへが賣る暗唾なら買にやアならねへナア與四郎 與置きやアがれ
 おれに迄喰つて掛つて 佐「兄弟今のはおれが悪るかつた 與「モウ其根性は止めねへう親方
 又氣を揉せる斗りが能でもねへせ 佐「夫もさうだあア 有「イヤモウ與四郎殿の氣立の好サ
 親孝行といひ篤實温順毎度ながら感心な者じや 吾「ハア夫では此若いのは親孝行かの有
 サアお聞被成升せ此の「大工の與四郎とて勘太夫が弟子なれを年季を勤めて通ひの手間取り
 所が母の長の病氣に夜の目も寝ずの看病で此頃全快に越たのも實の事愚老が此の功でもあ
 れど一つは看病が行届た故でムリ升るて 吾「夫は若いよ感心な男じやなア新「然し扱ひの
 酒肴は何うなるのだ 彌「斯して居るのも御退屈様だ 吾「夫は酒一銚子位は御寄進に附く積
 りだ 有「口を塞いでも居られまい○コレ御亭主く「ト煮賣屋より善兵衛出て來り「善兵衛
 「是は旦那方貴君方のお蔭にて何うか濟口になりそうな今のお詞へイく有難ムリ升る有
 「其事又附て一寸一口出して貰ひ度のじやが 吾「成丈簡略に頼み升 吾「夫は開帳場の商賣
 じやと申升て剣々様な事は致し升せぬ 吾「又剣れてたまるものか夫では皆一寸來てくれ音
 「サア佐太郎手めへも來てくれる佐「手めへ達が得心なら後は兎もあれ今日の所は負けて
 置う與四郎手めへも附合つてくれ 有「イヤ與四郎殿には少と愚老が話しもわれは 吾「デハ
 與四郎跡へ残るう 與「マア手めへ達の先へ往つてくれ 新「彌「夫じやアこつちも押出さへい

か甚「夫では醫者殿 有「御門番三人「與四郎待つて居るせ甚「サアお出被成升せ「ト八人
 店の内へこ入る向ふよりお米お仙出て來り「お仙「何とお嬢様賑い事ではムリ升せぬかいな
 ア「お米「さいのう此群衆の其中に彼お方がお出であつたら 仙「賑お嬉しうムリ升せうが○チ
 、お出でムリ升るわいなア 米「本にお出じやくくわいのう 仙「したがお連れがある様
 子お靜に被成升せいなア「ト舞臺へ來る「與「シテ先生お話とは 有「外でもない少と母御の
 事に附て御無心がいひたいのじや實は母御も全快とはいふものゝ未だく藥は止られぬじ
 や所が三月此方藥禮が滞て居るであらうがの○サ、斯いへばとて今寄越せといふのではな
 い好い仕事でもあつた時に少しづつでも入れて下され其代りには樂の段は差岡へはさ
 ぬ程に宜いの與四郎殿「ト此内女兩人は後ろへ廻りお仙日傘にて與四郎の脊中を突く與四
 郎見て「與「ア、コレく悪いく 有「何悪いとは 與「イエ何チ、さうだお袋の悪い時か
 ら段々お世話になり升た其藥禮迄滞らせ何とお詫び申さう様もないのですが何分看病に手
 が引けて仕事にも出られぬ始末然し此晦に親方から貰ふ勘定で少々でも○「ト此内お米鏡
 袋を出し金を與四郎にやつてくれといふこさしか仙心得小判を二枚出し紙に包み後ろより
 與四郎の手を引張るを振放すト「與四郎に金を握らし後ろへ逃退く「エへ、あの何でム
 り升其節と思つており升たが今不思議にも○イエ何是を藥代の内へ取て置て被下升せ有「何

の今でなうても宜いものをシテ是は何程あり升のじや 與「サア幾らあるやら〇」ト後ろを見るお仙指を二本見せる「イエ何大方丁銀で廿匁でムリ升せう 有「宜しい幾らであろうと〇」トいひながら紙包を開き「何をいふのじやは是は小判で二両あるが有 與「そんなら二両有「マア預つて置と仕升せう」ト店の内より善兵衛出て來り」善兵衛「先生ちやつとお出被成升せ 有「よし」〇夫で、與四郎殿 與「福田の先生 善「サアお出被成升せ」ト兩人内へこ入る」米「與四郎さん能う爰に居て下さんしたなア 與「夫にしても今のあの金大に有難うムリ升た 仙「サア今の御催促をお嬢様も聞兼て取計らうた金二両能う使ふて上げて下さんしたなア 與「イヤモウ面目もない今の一件是では愛想が尽るでムリ升せうねへ 米「私しや身分や身代に惚れた貴君やムんせぬわいなア 與「サア戀に上下の隔てはあいと能譽へにもいふやつなれどお前さんは鹽谷村で大名主のお姫御わつちは又叩き大工の分際で斯いふ中になつたのは實に勿体ない譯でムリ升 米「アレ其様な憎らしい 與「何うで女に可愛がられる男ではあり升せんのか 米「コレお仙おの様な事いふてじやわいのう 仙「ハア宜うムリ升わいなアモ、與四郎さん夫が氣を持たす手かご知らねどお嬢様も大体を御心配ではムのせぬわいなア 與「夫が濟まぬといふ譯、サ私も折を見合せ行度と心は飛立ようなれどお袋ん病氣上り夜は傍を離れられぬ故何にしてもお米さんお達者で宜いねへ 米「サア貴君も其

後來て下さんせぬ故愛想が尽たかお悪いかとお案じ申てかり升たに母御の御病氣と今のお詞なせ知らしては下さんせぬ私には大事の姑御御介抱も申さうもの他人と思ふて居やしやんすか貴君の胤迄舍したる私ではムんせぬわいなア 與「エ、胤迄舍した骸とは 米「羞しなからあの貴君の 與「そんなら彌折込たのか 仙「サア夫で心配するのはお嬢様斗りでなく元は私の取持故苦勞でやらぬじやムんせぬわいなアに因て旦那様へお前の事を譽そやし寧ろおの人をお聳に取ては如何なものとお伺ひ申た所 與「ム、何といひなさつたへ 仙「馬鹿者めがと阿られたわいなア〇サア夫といふも旦那様には薄々悟つてお出と見へ娘が好た者なら聳にせぬではなけれども我家は由緒あつて苗字帯刀御免の名主假令切米でも取る侍ならば厭ひはなれど職人風情を聳に取る上木藤左衛門が身分と思ふかどの御挨拶夫故お前に御相談が仕度とお出被成たお嬢様 與「シテ御相談とは 米「連て退て被下升せいなア 與「エ、米「サア今もお仙のいふ通り故所詮女夫になられぬ此身〇とあつてや、迄舍した中か否であらうと與四郎さん連て退て下さんせいなア 與「そりや元から釣合はぬ縁とは百も合點なれと名主さんの娘ツ子を女房に持てば鼻も高くお袋も悦はうと思つて居たれど今日の大工が明日から急に知行を取る譯にも行かねば何の道是は出來ない相談〇連て逃げては親への不孝此與四郎もお袋を捨てて行のれず所詮ない縁と諦めるより仕様はあからう 仙「サア是

が只の御身なら又思案もあらうけれどモウ五月の袖にも包めず知れた時には御短慮を御主人様の事なれば何の様を御折檻を被成れやうかと苦勞でならぬ此身より溢れ物を抱へたるお嬢様は猶一倍何うぞ能い思案をして上げて下さんせいさア 奥「サア幾ら思案を仕替た所が親やお前を連れて出たら直ぐに乾干よさらねばならぬ 米「イエ〜金子は私が何うなど 奥「夫は親の物を持出す心であらうけれど夫では彌濟まぬ與四郎 米「ろんなら貴君は何うあつても仙見捨る心でムんすかいなア 奥「是サお前途がさう尻を持揚ては困るが幸仙是といふもお嬢様のお身が案じられてならぬ故 米「何うぞ私の願ひをば 奥「夫だといつて是斗りは 米「お仙何う仕様ぞいのう 仙「何う仕様とはお氣の弱ひサアお覺悟を被成升せいなア「ト鑿を取出し態と死ねといふこなしお米吞込み」米「さうじや「ト自害を仕様とする」奥「コレお米さん何うするのだ 米「イエ〜貴君が得心なければ生て居られぬ此身の姪娘仙早う御自害被成升せいなア 奥「是はしたりお米さんお仙どんも主人に死ねとろんな不忠なやつがあるものか仙「ろんなら願ひを叶へて上げて下さんぞか 奥「夫斗りは後生だから仙其か心なら早うお果被成升せいなア 米「夫は此身の覺悟をやわいのう 奥「コレ待なさい逃る〜世間へ濟ます親方にも濟まね共お米さんを殺しては猶濟まぬ故連れて退うと仕升せうよ 米「そりや眞實でムんすかいなア 奥「嘘をいふのは嫌ひだから誠の事サ 米「そんなら

直ぐに今宵の内に 奥「マア待ててくれんなせへ今得心を仕た斗りだが親方にも餘所ながら禮などいつて行かねへ日にや義理が何うも濟まねへら内の始末も附て置て明日の晩に手捕つて 仙「若し間違ふたらお嬢様は直ぐに御自害でムんぞへ 奥「夫がさし度ない斗りに得心をしたのだがな 仙「夫じやに因て間違なう 米「必らず来て下さんせへ 奥「いよ承知だよ 仙「夫ではお嬢様觀音様へ御參詣はモウ止しに被成升て 米「是から戻つて其支度を與「そんならモウ歸り被成るのか 米「積る話しは山々なれど 仙「何かの事は明日の夜に 奥「夫でいお米さん 米「與四郎さん 仙「急度待てお入りぞへ「ト兩人向ふへへ入る」奥「ア、心配な事が出来て来たさア「ト店の内より佐太郎出て來り」佐太郎「味へ事を仕やアがつたさア「ト春中を叩く」奥「サ、佐太郎か何をするのだ 佐「何をするもねへものだ盤谷村の名主の普請の時に怪有る盤梅だと思つて居たが今聞けば味へ物を引掛やアがつたな 奥「夫じやア兄弟聞て居たのか 佐「與四郎何か密てくれ 奥「聞れては面目ねへが實にかれも心配だ 佐「掛ふ事があるものか引さらつて逃て仕舞へ 奥「だつて親もあるし親方へ濟ぬらぶれが氣がたまらねへのだ 佐「だらぶれといふ通りしろろこが名主の娘だけ身分を持つたが向ふの弱身で果は人に人が掛つて丸くなるは知れた事よし又さうならねへでも金と轉べばいゝじやアねへか 奥「止してもくれおれも大工の與四郎だ金が欲しさに名主の娘に疵を附け

たと思はれては親方の面皮にかゝるし實はかれも三日でも夫婦にあれば本望だか親方の所は宜からうか 佐「夫はかれが引受たのら女の頼も叶へてやれ與「夫じゃ兄弟頼むがいゝか 佐「爰らが兄弟弟子の好身だ任して置な 與「夫でちつとは力が附て來た様だ 佐「夫では與四郎 與「佐太郎兄イ〇〔ト道具箱を擔ぐのが道具替りの知らせ〕委い話しはあしたとるせ 佐「主の所へ出て行う〔ト此模様宜く辻打にて道具ぶんどす

本多歸國密談の場

本舞臺平舞臺目附大襖上下漏斗又飾りし襖の見切橋掛襖戸家口杉戸大欄間をおろし薄縁を敷詰都て宇都宮城中廣間の休長野淵部西川服部住居時計の音にて道具納る

長野 何と各我君には俄かに御歸國あらせられしに淵部御入城に先立御善提所へ御佛參の上し西川斯様の義は未だ御先例も是をければ服部何の御當家に凶變あつての御歸城ではふるまいる 長「何にも致せ此由を四人河村殿へ〔ト奥にて〕河村「アイヤ知らせよ及ばぬ河村鞆負只今夫へ參るでムらう〔ト出て來る〕淵「是はく御老人には四人「イザ先お席へ 河「聞けば殿には火急の御歸國得て鹿相のあり勝なればお玄關迄四人お出迎ひの仕らん〔ト向ふにて〕呼「殿様のお着 西「ア「イヤモウ殿の四人お着の知らせ 河「急がつしやれ〔ト向ふより本多上野介小姓刀を持近習大勢出て來り花道にて河村等に行逢ひ〕本多「河村か 河「ハッ我君

お出迎ひの爲罷出んど存せし所君には最早お入と相成不禮は眞平御免下し置れ升せう本「俄の義なれば苦しうあいぞ五人「ハア、本「其方共には宿所へ下つて休息致せ近習「ハア、〔ト向ふへと入る〕河「何は然れ我君よはお席へお着き五人遊ばされ升せう本「ナ、〔ト皆々舞臺へ來り〕河「先以て我君よは御安全の御着且は隠しき御尊顔を非し長「恐悦申五人「上げ奉り升る本「其方等にも健固にて重疊く 河「何は扱て置き伺度は今日の御歸國御佛參を先とせられしは何か上に變りし事にても是なきやお案じ申上升る本「心遣ひは尤なれど俄に歸國致せしは公儀のお覺へよき故なり〇此度當國二荒山東照神君の御廟御落成相成しに附此度將軍家光公御社參是あるべき旨仰出され則當城に一泊あらせらるゝとの台命君を設けの手當萬端用意の爲にお暇賜はり歸國致せし上の御用も父が忠義の餘光なりと扱こそ御墓に詣し某河「誠に君の仰せの如く父君の忠義を思へば御當家十八石の御知行の仇ねろそかには思はれず殊に駿河公お預の身とあられしもお附の君にはお祟りなく剩へ御社參に御一泊あらせられんどの仰出されも忠臣無二の佐渡守様なれば御當代に至る迄二心なき者との思召と存すれば鞆負涙か溢れ升わい長「實に此度將軍家の御一泊とは上のお覺へ宜き故と思へばお家は万代不易淵「斯様を悦ばしい義は四人ムり升せぬ 本「予は河村に申聞ける義のあれば 西「然ば是へ四人お褥を 本「ア、イヤ臣下とは申ながら父が紀念の河村に負

へ大事を語るに擬は無禮 河何大事とは 本「イヤ大事ない其方共には立々」四人「ハッ本」密用おれは立と申に四人「ハア、」ト四人は橋掛へこ入る「河如何なる火急の御用か知らぬぞ御佛參の儘御用とは 本「進め 河ハア、」 本「其方予を誣るか何うじや 河如何ある義うは存せぬ共お家のお爲にならぬ義なればお諫申が臣下の役 本「予は其諫を用ぬぞ 河是はけしからぬ先君御世界の其砌り我死後忤上野介家を乱と義もあらば意見なし若し聞入ざる其時には平討にすとも苦しからずと仰せ置れし御遺言お家の爲宜しからずば御意見おしお用ひなくば河村鞆負 本「予を討て棄ると申か 河お家御大切にムり升れば 本「然し鞆負其大切なる家をも身をも義の爲には棄るが習ひ其方何と心得るぞ 河其義と仰せ迄もあく忠義の爲とムり升れば如何で惜み申さんや 本「然と左様か○老人太義ながら」ト心を附よといふこなし河村三方の襖を明け間毎とく庭先をも見せ元の所へ來り」河御覽の如く他聞の義は 本「ム、○」ト懷中より連判狀を出し「是を披見の致せ」ト河村披き見て「河ヤ是は 本「コリヤ」○其方に申開る子細と申之其連判則夫に記せし通予を初筆として平岩鳥居剱倉戸川杯恩顧の諸氏忠長公を徳川家四代の跡目に立んす心底其方逆も當家の重臣姓名も記し置たり今より力を尽しくれよ 河「アイヤ我君以て外ある其か詞駿河公に御預けの御身の上其君を將軍になさんとはコリヤ我君にと御謀叛よな 本「如何にも謀叛よ相違ない河」

何と仰せなさる 本「駿河公に御幼少より二代君の御跡目と御家門國主も心を寄せしに豈圖らんや妾腹の竹千代殿が三代の御家督せめては天下を二つにと駿河公の御望みも終に御父君の怒りに觸れ長のお預けのお暇乞にお目通り致せし砌り仰せ置れし御一言肝に銘して忘られず因て夫なる人々と相計り此度御一泊の折を幸ひ弑し奉らん予が決心其方逆も正純に仕ふるのらは予と等く駿河公には御恩の君なり善も悪さも忠義の道一味同意の血判せよ 河「コハ我君には物に狂ひ給ひしか駿河公には御本腹にて家光公には御妾腹よはムれ共順を以て御家督に立給ひしり三代こそ御大切と神君の思召夫に天下を分たんと望むは駿河公の御謀叛に紛れなし御勘當あらせられし先將軍のお計らひは實に感心仕る其駿河公の御爲に當將軍を弑せんとは 本「コリヤ密かに致せ 河「イヤ」申上げねば相成らぬ公儀に於ても駿河様を御本腹のお子様と思召ばこそ大納言の位を授け給ひ百五十万石の御大祿諸侯に於ても將軍家御同格のお扱ひと定め置れたではムり升せぬか夫を不足と思召し自ら罪を招きたる君を助けて恐しき工みを思立給ひしとは末世末代逆賊の汚名を記録に止め給ふか本元より逆にして順にあらずおれども一旦忠長公の附人となつたる以上は駿河公こそ大切の君なり其君辱しめを受け給ふに臣争で死せざらん固より事を成就さす共予は主君を害せる逆賊家の立べき謂れなし夫なればこそ菩提所へ詣で、不孝の其罪を父尊靈に詫びしかり

最早命も家國もなきものと存する某無益の舌の根動かすとも予に於ては用ひぬぞ 河「コハ
 お情なき君のお心先君の御苦勞より成上げたか家をは物の敷とも思召さず斯る逆意に組せ
 よとてお家は君が譲りを受けても御許言は拙者が守れり悪き所は飽迄もお諫め申さにか相
 成升せぬ 本「假令其方億万詞を費す連も君に頼れ申たる心は變せぬ本多正純 河「スリヤ夫
 故に家をも身をも 本「捨るは元より覺悟じやわい〇「ト河村連判狀を持立にかゝる「コリ
 ヤ待鞆負何れへ參るぞ 河「ハテ知れた事お家の爲天下の爲に訴人をは 本「何訴人をなすと
 な 河「君今にして御改心遊ばさば世間に此事知る者なく亡君にも御満足にましまさん鞆負
 眼の黒き内は如何でお家を穢さんやサアお家の存亡今此時御返答が承り度〇「ト本多刀を
 取て抜掛けるを「我若何故か刀に 本「イヤ手を掛しは諫を入れし忠義の褒美に其方へ遣
 さうと存じて 河「スリヤ拙者めに 本「當座の引出納めて置きやれ 河「ハア、〇「ト本多切
 附る河村身をうはし其手を押へ「欺し討んと計り給ふは扱は御改心は偽りよな 本「黙れ鞆
 負我も本多上野如何で思ひ止まらんや斯密事を明せし上は汝が頭へ我に與へよ「ト又切掛
 るを急度止め「河「スリヤ何うあつても 本「くどい 河「此上は是非に及ぬ鞆負御同意仕ら
 ん 本「スリヤ主従の義を思ひ同心を致すと申か 河「某曾て戦死を遂げなば少しは美名を遺
 さんものを長命致せし因果にて逆賊の名を残さん事残念至極にムれ共君に隨ひ奉らん〇「

「ト連判狀に血判をし、イヤ血判を受取被下升せう本「ム、満足と思ふぞ河「レテ君には
 如何なる手段を設け三代公を失ひ奉る御所存なるぞ 本「されば其義の毒殺の外上策は 河
 イヤ、夫は旅中の義なれば毒味の妨げはあるべし左すれば御本望は遂げらるまじ 本「レ
 テ其方に工夫があるか 河「拙者思ふ所存がムるがレテ御社參の日取の義ハ本「則來月十三
 日が江戸御發駕にて其夜は武州岩槻泊り十五日が則當城 河「左とれば廿日の日間あり〇鞆
 負一策仕らん 本「レテ當日の手段は何うじや 河「恐れながら「ト叫く 本「スリヤ釣天井に
 て 河「モン「ト本多は扇を膝に突く河村は扇を開く是を一時の木の頭河村扇を覆ふて叫く
 此模様宜く眺らへの合方にて拍子幕

五幕目

役 人 替 名

- | | |
|-----------|-------------|
| 一 河 村 鞆 負 | 一 大工後生樂の音次郎 |
| 一 大工棟梁勘太夫 | 一 同ちよいくら持の吉 |
| 一 大工與四郎 | 一 同受込好しの長藏 |
| 一 大工佐太郎 | 一 同けちん坊の仙松 |
| 一 勘太夫女房お塚 | 一 同お笑草の龜吉 |

- 一 藤左衛門娘お米
- 一 同くづの榮吉
- 一 下 婢 お仙
- 一 磯田文之進
- 一 醫者 福田有庵
- 一 川上牛蔵
- 一 下 婢 お松
- 一 大工の小僧 芳松
- 一 大工雷の源次郎
- 一 同 房吉
- 一 同 芋虫の久吉
- 一 同 近習 三人
- 一 同 お茶ッひいの米吉

大工棟梁勘太夫内の場

本舞臺常足の二重二階家造り此内一間の落間止面紺腰藤を掛け二重の見附障戸上手二段の戸棚下手材木を建掛し替判例の所門口軒口に建前の鎬矢を取付け二重に大なる箱火鉢都て大工棟梁内の体爰に芳松房吉お松有庵居て八から鉦入のよいとこさうだよの唄にて幕明く芳松「ア、痛い〜房吉おいらのせいじゃあいよ三年先の鳥の精だお松何だへ芳松さん大きな形をして泣といふがあるものゝいなア 芳、痛い〜 有、小僧何所が痛いのじや指を押へて泣て居ると怪我でも仕たのか 芳、切たのだ〜 房、おいらのせいじやないよ 松、コレ房吉さん此子が怪我をしたといふに踊るといふがあるものゝさうして何處を切たのじや

いなア 芳、今お松さんお前が焚附といふからあの鑿でこなして居たら房さんがこつちへ出せといつて取たのだから此親指を切たのだ痛い〜 松、コレ房吉さんお前なせこん奇事を仕た今に親方がお歸りになつたら直ぐにいふからさう思つてお出 房、でもおいらが割てやるから出てといふに出さぬものだから切たのだ 松、此子がそるといふならさして置ばよい事を〇何ぞ先生お薬はあり升まいの 有、醫者は醫者の心掛で血止め位は持つてゐる。〇「ト粉薬の包みを出し」是を附てやるが宜い 松、是は大きに〇芳松さん先生がお薬をおくれだおらお禮をおいひ 芳、伯父さん有難う 有、何處を切たか見せるが宜い 有、是は深う切た様子よい〜明日清薬を持つて来てやるからあの薬を附けて置くが宜いぞ 松、さうして先生御商賣柄の事故何にでも利く薬を持てお出でムんせうなア 有、ろりやモウ貧の病の外の薬なら何なりと 松、夫ではあの〇惚薬はあり升まいかあア 房、ヤアお松さん與四郎さんに掛けるのだ 松、エ、モ此子わいなア惚薬は乳母に行く支度をして置のだよ 房、嘘々皆仕事場でお松さんは與四郎さんに夏の牡丹餅だといつて居るのだ 松、どさつて居るといふのかへ 芳、チイねお松さん薬を附けておくれな 松、附けて上るから臺所へ一所にお出 房、お松さん此の焚附を持つて行ねへおいらが半分擔いでやるから 松、是は子僧の役だのに。〇「ト天秤棒にて差擔ひ」夫では先生何れ今のお薬を 有、よし〜 房、ろんならお松さん 芳、痛い

く「ト三人暖簾口へは入る」有「アハ、いあの面相で惚薬を振廻はされて堪るものか」ト奥よりお塚出て来り」有「ア、福田の先生お出被成升せ。有「是はお内義先日はお邪魔を致し升た。有「モン先生お薬禮の事を勘太夫殿に申升たらあの與四郎は役に立ちなくて叶はぬ者なればお薬禮のこちらら致を積り御催促を受升て甚だ濟ぬ事じやと申て。有「イヤ御催促といふ譯ではムらぬ次手に一寸申たのですが夫も昨日與四郎殿うら清瀧の開帳場で金二両頂戴致し升たが餘程面工が好いと見へ升な。有「あの與四郎は通ひにて工手間は晦日に渡す職人夫に二両といふお金を何うして工面を致し升たか。有「ト下手よりお松様子を聞居て。有「夫は怪しうムり升わいなア。有「エ、モ悔りした何じやういなア。有「松、何でもあの與四郎さんの近頃めかし込んでおり升のは色が出来たに違ひムんせぬわいなア。有「何をいふぞいおア世辭追従のない與四郎が何で色事などをば。有「松、イエ、二両といふお金はは何處ぞにてつかりと。有「アハ、い、是は彌夏の牡丹餅。有「ハイ、少とムつており升わいなア。有「ト向ふよりお米お仙出て来りお仙、是はしたりお嬢様滅多に氣遣ひはムり升せぬわいなア。有「米、イエ、いあの様に支度をしたからは今宵お出のない時の爺さんの氣が附いたら言譯がならぬに因てちやつと逢はしてたもい。有「仙、ア、コリヤ困つた事じやなア。有「ト舞臺へ来り御免被成升せ」有「ハイ、ト門口を明る」有「あのこちら様に與四郎さんがお出でムり升かいなア。

有「松、ソレお神さん御覽被成升せ是じやに因て油断もすさもあらぬではムんせぬわいなア。有「是はしたり失禮な。有「ソレおきたまはせこちららお越しでムり升る。有「仙、アノ、櫻谷村から参つた者でムり升る。有「さうして與四郎には何の御用で。有「仙、サア其用は○嬢様何でムり升たぞいなア。有「米、エ、モ茶の間の普請とでもいふたがよいわいな。有「仙、本に夫々茶の間の普請に附升て。有「夫では若しやお名主様からのお使ではムり升せぬか。有「仙、ハイ其上木藤左衛門より。有「夫はマア、何うぞ此方へ。有「夫でいお嬢様。有「米、イエ、こ入らいでも逢ひさへすれば仙「デモ斯なつたらと入らさばおられ升せぬわいなア。有「ト兩人内へ入る」有「松、ソレお神さん斯いふ者迄は入つて来る故。有「米、エ、モ其様な事をいふ手間でお茶など差上ぬかいなア。有「松、存じ升せぬわいなア。有「米、ソレ貴嬢様は。有「米、アノ私と藤左衛門が娘お米と申升る者。有「左様でムり升るかさうして茶の間の御普請とい何ぞ先日鹿相でも。有「米、イエ、さういふ譯ではムり升せぬ。是は與四郎さんに逢ひさへすれば分る事でムり升る。有「其與四郎の仲間の者と勘太夫が連れ升て河村様へ参つており升る。有「米、ソレ見やいな。有「モウ日暮に間のおいにコリヤマア何とせうぞいな。有「仙、マアお待被成升せ。有「ソレ與四郎さんのお歸りは。有「今にも戻らうかと存じ升る。有「ト火鉢の上の扇を見て。有「オ、是は良人の扇じやが忘れて行しやんしたのかいなア。有「夫では改つて行れたと見へ升の。有「ハイ、コレお松芳松を呼でおくれ此

扇を持たしてやるから、（ト）暖簾口へ入る。夫は出の部屋敷へお使でも上るなら甚だ申兼升たが言傳を願ふ譯には、（ト）其事なきば與四郎よりも夫へそれとば、（ト）仙、イエ是は與四郎さんに限るのでムリ升わいなア。（ト）其言傳は、仙、茶の間の普請の事に附て今宵初夜迄に来てくれる様お禮遣と召使が態々来たとかつしやつて下さり升せ。（ト）夫、畏り升てムリ升る。仙、夫ではモウお暇を致し升る。米、大きにお邪魔を致升てムリ升る。夫、是はお使柄御苦勞様でムリ升る。（ト）兩人門口へ出る。（ト）何うか今の様子では、（ト）夫、あの與四郎と譯ありそうな。（ト）暖簾口より芳松出て來り。（ト）芳松、お神さん往つて來升せう。夫、チ、芳松の親方に此扇を渡してお出。夫、ハイ。夫、お前夫は何したのじやへ。夫、是は手と切升た。米、只さへ心に掛るのに。仙、手を切たさと思はしい。（ト）お塚扇の親骨の取れしに心附。（ト）夫、コトヤ扇の親骨が。（ト）お米、廢物の鼻緒を切り。米、お仙鼻緒が切れたわいのう。夫、かいらの切たは此親指。夫、返とくも心に掛る。有、何ぞ事ある。仙、餘もやさうした米。（ト）夫、夫でも何うやら。（ト）お米、お塚頭を見合せるお仙はお米を引廻して門口を締るお塚は扇を取落と是を一時の道具替りの知らせ。（ト）仙、お喧しうムリ升た。（ト）此模様合方にて道具おん廻す。

河村邸大工發應の場

本舞臺平舞臺見附襖橋掛戸家口共杉戸大欄間をわろし薄縁を敷詰都て河村屋敷廣間の体安よ佐太郎音五郎万吉源次郎久太作兵衛米吉長霞仙松龜助榮吉與四郎勝を扣へ文之進半蔵酌をして居る浮九合方にて道具納る。

文之進、何うか何れもお過し下され。夫、某お酌の仕らん。夫、チ、（ト）大將さう左様然らばの切口上で久太、上下附合は御免を蒙りてへナア。俱利迦羅、佐太郎、さうだ馬は馬速でやつて貰はねへと素敵渡法界を御馳走も咽へ詰て有難迷惑。ね、作兵衛、所で盃なんども井鉢かぐい呑茶碗にして貰ひてへな。米、チ、ヤイ登澤な事をぬらすなへおれの智慧の何なものだ長吉、何だ此野郎は汁の椀で吞で居やアがらア。仙、おれも一盃やつて見様チ、お頭さん頼み升。文之進、如何にもお酌仕るでムらう。夫、チ、ヤイ與四郎さつきから隣と白暎ッ子をして居るがどうしたのだ。與四郎、おれは腹が痛くつて。夫、腹が痛くば吉野へムれ。音五郎、鎌倉時代の晒落を擔ぎ出しやアかつて耻を知れく。万吉、ヤイ音子壘を少しむしつてくれ。おれが切れて堪らねへ。音成程、是はお慈悲を願つておぐらかさどやつたら何うだらう。夫、何うか勝手に。文、致したが能くムる。源、そいつは助つた皆、皆おぐらとくらはせろく。（ト）奥より河村勘負出て來り。河村、皆機嫌好う致してゐるお。文、夫、コ、御主人にムリ升るか。夫、チ、御家老さんだ皆、（ト）畏れく。河、コトヤ、（ト）某が參ればとて堅苦しう致しては相成らぬ皆氣樂に致してくりやれ。

「ト奥より近習禰蓑益を持出て來り河村を住はす」源誠も何うもてへ層々御馳走になり升て御家老さんに何とも早濟ねへ事でムリ升ヤイ皆か禮を申せ〜皆々へイ御家老さん有難う河イヤ職人杯と申ものは詣ひがなくてよいものじやな文半御意にムリ升る河扱大工共今度上様日光御社參に附常御城内へ御一泊あらせらるゝに因り新御殿建設けの思召作事の義は勘大夫より承つたであらう久へイ夫は棟梁がいふには此度の御普請の腕の勝れた者斗り撰取て來いといふ御普請奉行一の瀬さんから言附たそうでムリ升斯鼻を並べた連中は憚りながら仕事と喧嘩酒呑に掛たらば引を取る様な人間ではムリ升せん皆々何分か願ひ申升河然らば姓名を書留る間左様心得よ尤席を分ちし他の大工共は只今相濟だれば文之進書記るせ文畏つてムリ升る〇「ト河村は手箱の内より神文を出し硯箱に添へて渡そ」半藏殿貴殿一々お尋ね下され半承知致したマお手前は何と申源わつちは雷の源次郎とやつて置ておくんかせへ半マ其次は久わつちなら半虫の久太と書て置ておくんなせへ半ハア半虫とは苗字かな久マ骸がくり〜と太て居るもんだら苗字でムリ升せう半マ其次は佐わつちやア俱利迦羅の佐太郎と申升半大分いかめしい名じやな佐夫といふも此通り骸一ばい紋々がありやすので通り名でムリ升ト皆々の名前を記る事あつて半すつと末座にゐる若い者お手前の名は何と申す五コウ〜與四郎名をいへ

といつて居るじやアねへり奥からア氣色が悪いから何とでもいつて置てくれ万夫じやア正直の與四郎と附て置ておくんなせへ半スリヤ彼者は正直の與四郎と申か文名は體を願はそとやら頼母しい者じやの河マテ以上何人に相成ぞ文ハッ勘大夫を除き廿八人にムリ升る「ト神文を河村に渡す」河血判を致させい文ハッ〇「ト神文を受取り」サ血判致せ奥ア、モンネりや何の血判でムリ升る河其義は只今申せし如く尤大切な普請なれば出来迄は相違なく出精致すといふ書附奥スリヤ夫故に御血判をば文他の大工共は奥にて斯の如く相濟たれば源四郎より致して宜らう半刃物は只今與へるであらう「ト硯箱の中にある小柄を渡す源夫では皆順に廻すぞ皆々マア手前から始めてくれ奥兄弟一寸來てくれ佐何た「ト與四郎先に立花道へ行奥チイ佐太郎何うしたら宜からう佐何うとは何だ奥かめへも知つて居る通り今夜逃る彼約束夫に親方に連れられて來て見たれば此一件夫も今聞て居れば血判迄取るむつうしい仕事おれが骸は往つてやらねば死ぬといふ今日の今あの血判をさせられては佐ハテ夫たらら正直といふのだ何も血判取れたとて欠落の出来ぬ譯ではなし今にも爰が開けたら夫のら直ぐに出掛やな奥夫では血判だけして置ても宜のらうかな佐いひといふ事よ「ト此内舞臺の皆々血判する事あつて」万ヤイ〜與四郎か鉢が廻つた皆々早くしろ〜佐エ、五月繩へ奴だふア「ト元の座に歸り兩

人血判すら事あつて「サア是て皆済だのだ 源へイ左様なら」「ト前へ出す」半「イヤ御前か
 検め置れ升せう 河、血判儘に受取た」「ト前より勘太夫三寶に目録包を乗せ持出て来り」

勘太夫「御家老様」「ト河村神文を隠し」河「ナ、勘太夫か 久棟梁今日は 皆々何のど大きに
 勘「其御馳走斗りではないぞ今御祝儀としてか目録を下さつたからか禮を申せ」「ト祝儀包を
 配る 米、夫では此上皆々」か金をば河「御普請出来の上は猶改めて御褒美を下し置る」ぞ貴
 そんなら此上 皆々又御褒美を 河如何にも工手間は三増倍と相定め時々の心附は致せど
 も改めての御褒美は祿にせよ金子よせよ望に任せて遣をぞ 佐「ナイ與四郎聞たか 與兄弟
 夢の様な話したなア 勘「イヤモウ御家老様此度の様か手當は今迄にないか家の御普請餘
 り結構過るので何うも合點が参り升せぬ 河夫も時日を急ぐ故 勘「シテ御普請のか好みは
 此圖面の通り致してくりやれ」「ト手箱の中より圖面を出して渡す勘太夫見て」是では天
 井が二重になりは致し升せぬか 河「エ、勘「柱の中ら綱を取り是で持す機關の仕掛は然
 も二重天井は一体何の爲に被成のでムリ升る 河夫と斯様じや將軍家御着の節其天井を
 下げおろし上にて人形の働きを御覽に入れんとか慰みの爲に設る則御殿 勘「成程夫が人形
 なればお慰みにもなり升せうが若し大磐石であつたら何と被成升る 河「ヤ 勘「釣天井は天
 下の御法度ははか斷り申升る 河「ナ、不承知なれば頼むに及ばぬ其方の屋敷に留置外廿八

人の大工を以て此普請を 勘「何とかつしやる 河「是ある一書披見の致せ」「ト神文を見せる」
 勘「ヤ是は 河「其神文に背くに於ては神罰を蒙る者と承知の上の其血判 勘「そんなら一同
 得心でとんだ事をしやアがつたか」「ト思案の思入」與「モン親方一寸顔を貸てお貰ひ申度
 ムリ升る○」「ト下手へ行」ナイ皆爰へ寄てくんぬへ 佐「さうして親方あの書圖に皆々何の
 不思議でもあるのうね 勘「夫は血判迄する程なら委く聞た上であらう 與「何親方決してさ
 うではあり升せん只仕事を精出す様にとあつて 佐「血判しろといつた故深ひ譯のあるとは
 知らず 源「皆夜る手習をした人足で譯の分らぬ所から委細構はず皆々」つツ突たのです 勘「
 夫では手前達は何にも知らずに血判をば皆々」さうです 勘「此棟梁を出し扱て斯いふ工みよ
 乗せられたら所詮免れぬ絶体絶命皆々」エ、勘「イヤ何錢の長い仕事だから手前達もやつて
 くれ此勘太夫も引受てやらねば多くの人の命○イヤサア芋虫ついでくれ」「ト盃を出す」與「
 モン親方不斷嘗ても見ぬ酒を 佐「今日に限つて皆々呑み被成るのか 勘「酒でも呑まねば今
 日斗りは○サア癡應の此御酒も普請に附てのか祝ひなら呑ねば済ぬ胸の内 源「夫ヒア棟梁
 諸取て皆々」此仕事を仕被成のう 勘「だから祝についでくれ 久「さう棟梁さへ承知から元よ
 り望む皆々」此仕事 與「夫も何うぞ侍に 皆々」エ、與「イヤモンか件親方の承知でムリ升せ
 文「承知とあれば誓の神文」半「文」血判致せ」「ト勘太夫血判なし 勘「此御普請を諸取升た印の

血判(御家老様へ 河、早速の承知過分あるぞ落成の上にて褒美として五百石五千兩遣の中間普請出精致す様此段申渡し置ぞ 勘へい 普、サア皆も褒美を考へて置け皆々望みの通り下さるのだ 與へい御家老様へお願ひ申上げ升る 河、正直の與四郎とやら此河村に願ひとは 與、外の事でもムリ升せぬが御褒美に附升て御家老様へお願ひて武士になり度此身の望み何うぞ侍にお取立が願ひ度ムリ升る 河、望みの通り只今普附を取らし置ぞ 與、そんなら普附をおくんなさるのでムリ升か 源、ヤイ、與四郎利た風な事ぬかそなへ米、夫より金で皆々願つて置け、 佐、イヤ與四郎の願ひなら侍に限つて居るのだ 皆々、そりや又何で 佐、イヤ人にはいへねへ事だ 與、兄弟悦んでくれ是で今宵の欠落も○イヤサ勝手に何うなどぬかして置け今に悔りさしてやるから皆々、晒落た事をぬかすなへ、ト此内河村墨附を認め 河、與四郎とやら此墨附を取らし置ぞ 與、そんなら此墨附とやらいふ物を○とサいふた所で盲同然親方讀でかくんささい升せ 勘、一此度新御殿普請成就の上の御褒美として其方望みの通り百石下され武士に取立遣はす者也(與四郎へ河村鞆負判 佐、そんなら知行百石の 與、此與四郎を侍に、ト墨附を取て行うとするを、河、コリヤ何れへ參るぞ 與、一寸今日はお先へ御免を 河、イヤ歸す事は罷ならぬ 與、とは又おせてムリ升 河、普請出来致す迄一人たり共戻と事の相成らぬぞ 佐、エ、そんなら普請の皆々、手離れ迄は 與、歸る

事は出来升せぬか 文、如何にも 與、タイ兄弟何う仕様か行ねば昨日の最期行にも行れぬ今宵の難義 佐、斯いふ事とは夢にも知らず仙、一人も内へ歸さぬとは 榮、内への噂アや子もあるし、普、親を抱へた其上に、万、貧乏暮しの大勢、手合故、佐、此儘爰に留られては、與、命に關はる皆々、事なれば、文、イヤ家内は上より手當をさし、半、道具箱をも取寄せれば、源、夫ヒア棟梁皆々、何うあつても、勘、斯いふ畏に罹られたが因果と思つて辛抱してくれ、源、夫では何うでも皆々、此普請は、勘、何れ譯があつての事皆々、さう聞く上は、河、身動きなせば○命があいぞ皆々、ハア、河、一方ならぬ好の普請仕上げの日限○、ト刀を持って立上るのが木の頭、相待おるぞよ、ト此仕組宜く詔らへの合方にて拍子暮

六幕目

役人替名

- | | |
|-----------|-------------|
| 一 河村 鞆 負 | 一 普請奉行一の瀬主計 |
| 一 大工棟梁勘太夫 | 一 門番大竹甚太兵衛 |
| 一 名主藤左衛門 | 一 仲間 新 六 |
| 一 大工與四郎 | 一同 彌 助 |
| 一同 佐太郎 | 足 輕 大 勢 |

一 藤左衛門娘お米
一下 婢お仙

仲間一人
竹本連中

新御殿作事小家の場 其一

本舞臺一面に作事小家真中木戸口錠をかるしあり上の方に番小家捕縄六尺棒突棒刺股袖がらみを飾り辻行燈松の立木同じく釣枝都て宇都宮城内作事小家の体爰に瓦燈を灯し新六彌助居て時の鐘風の音合方にて幕明く

ト橋掛りより仲間十六出て来り 十六火の廻りく〇チ新六彌助今夜は番か 新六どうくお鉢が廻つて来たのだ 十是も仕置の爲に宜からう彌助置きやアがれ張番中は酒は禁じられ 新とんだ普請が始まつたのでからつちの大に迷惑だ 十夫は此夜廻りも同じ事だ河村様が御自分で大工のお検めがあるのと一の瀬様の見廻りでづるを極る譯には行ず大難義サ何にしても此新御殿で江戸の親王のお泊も彌明日の晩だろうだ 新明日は呑るだろう 十能く呑事をいふ男だかアト時の太鼓よなり彌チ、モウ六つのお太鼓だ 新検めが出て来るだらう 彌提灯と附て置け 新合點だ 十おれも廻らうか火の廻りくトト上手へ入る橋掛りより仲間提灯持一の瀬主計足輕二人附添出て来る兩人は平舞臺へ下り新彌御苦勞様でムリ升 主何も變つた事はないか 新彌一向にムリ升せん 主案内致

せト兩人木戸口へ来り彌チ大工さんか検だ 新皆並んだくト主計内を窺き主大工棟梁勘太夫子方の者は揃ふて居るか〇よ、揃ふてからねばならぬ筈じや〇コリヤ番の者將軍家に彌明日が當城御一泊の當日にて今晚が大切なれば能々心を附よ 新彌畏つてムリ升る 主宜いか〇參れト仲間足輕附添引返して入る新是で一時は又役が免れるといふものだ 彌さうだくト柵の中へ佐太郎出て来り 佐太郎其所に居るのは新さんに彌助さんじやアねへか 新チ、さういふのは佐太郎さんか彌夫じやアかめへも今度の仲間に入て居たのか 新夫故往生実念佛だ然しあの日の事を根に持て居るだらうな 彌馬鹿な事をいひねへ男は當て碎けるだ 新其時猪口を取交はしたから何遺恨も懸筆もあるものかしたか何ういふものでかめへ達ハ斯う出こ人を喧しくいはれるのだ 佐サア貴の仕事には河村さんが附ッ切て夜は丸で囚人の始末だが何の事だか譯が分らねへ 彌夫じやアかめへ達にも分らねへのか 新何にしても不自由だらうな 佐然し喰物は鮒でムレ鯉でムレ不斷だし三日に上すの心附は結構過た身分だが夫を使ふ事に行ないから毎晩博奕がはづむと斗りで 彌さいつは仲間入がきてへものだ 佐違へねへ時に新さん手を出してくんねへ 新何だ何うとるのだ 佐是は少々斗だが取て置てくんねへト小判一枚渡す 新さいつア氣の毒だな〇コウ彌助禮をいへかかしの蓋を一枚くれたせ 彌さいつは有難な實は懐でも

満足だつたら今夜の番は人でも買て出と所を御自身よか勤め被成始末だ 新「其中へ一兩どは實に浮み上るせ 佐「さういふ御難の場合から今夜はてらでも貰つて遣らう 彌「ういつは有難へ 新「何分頼むせ 佐「夫じやア後に 新「彌「佐太郎さん 佐「エレ〇「ト押へるのが道具替りの知らせ」靜に仕ねへおめへ達に難儀が掛るせ 新「彌「違へねへさうだなア「ト此模様宜く合方風の音にて道具ぶん廻す

新御殿作事小家の場 其二

本舞臺常足の二重荒木の板を並べし葺下しの家根見附雨戸の裏を見せ前側二間程明け左右雨戸松の立木同じく釣枝都て普請小家の体二重に荒席を敷き與四郎蒲團を被り寐て居る此隣に寐所を敷人の出たる跡床の三重風の音にて道具納る 彌「風騒々夜の景色も只ぢらぬ古松むら立城内には夜廻の聲絶間なく非常を守り守らるゝ身は犯したる罪もなく囚徒に等き扱ひの夜の目も合はぬ小家の内臥戸の様ぞ哀れなり「ト上手より佐太郎出て來り佐太郎「何だ今の手合にてらでも仕様といつて歸つて見ればレエ〇「ト燵皿を明る仕形をかし」を止めて寐て仕舞たのか〇 彌「物に縛はぬ職人の其儘其所に寐やの戸も風洩る小家の板庇月の明りも羞しく一人身を泣く與四郎が聲聞附て起直り「ナイ何を泣て居るのだ與四郎〇〇「彌「揺り起せせ起もせず猶泣聲の聞ゆれば「エウ與四郎起る〇〇 彌「無理にめくりし蒲

團の内與四郎是非なく顔を上げ與四郎「兄弟まだ寐ねへのか 佐「寐様と思つたれど何だか手めへの泣聲がするからハ、ア又お袋の事を思出したか但は鎌谷村の一件かと思つて起してやつたのも何ば女に逢はれぬとて男の癖に泣くといふがあるものか 彌「辱められて目をすり赤め 與「笹棒め泣く様な老碌はしねへけれど餘り夢見が悪いから若しもの事でもありや仕ねへかと悲しくなつて涙が溢れて堪らねへのだ 佐「彌「女の事を思出しやアがつたな 與「ろんな事を親方に聞かれて見る何んなに阿られるか知れやアしねへ 佐「何大丈夫だ〇ナイ親方〇〇此通り白河夜船だ 與「夫ならいふが何う考へてもれ袋があらア氣は掛つてならねへのだマア聞てくれ〇不斷から一晩でも内を明けても案じる親の慈悲を思へば何一つ孝行もせず淫奔のら女を連れて逃る覺期で親方へ暇乞に往つてから連れられて來て廿日餘り便をせぬ故おれを案じ病ひが重つて死でもせぬの七日續けて見た夢が何うも氣になつて堪らねへや 彌「涙見せじと堪ゆる程胸に迫つてひせ入ば 佐「ナ、尤だ早う歸らうと思へばこそ皆が一生懸命で昨日御殿も出來上たのに今に歸してくれぬからは先の分らぬ皆の骸内でも瞋案じて居るだらう 彌「餘所の話も與四郎が身には堪らぬお米が事 與「サア兄弟實は親の夢見の悪いに附ても案じる名主の嬢さん胤迄合して家にも居られず連れて退けとの刃物三味斯いふ譯とは先では知らず突詰めた所から死にでもせぬかと心に掛れど出るに知られぬ籠

の鳥夫も此黒附の通り百石取の武士になつたら否應なしの名主の智と樂んでは居るもの、案じられて何うもならねへ。神しはれ返りし與四郎が詞を傍に最前より聞くに附けても氣の毒と起上りたる勘太夫「ト下手の戸を一枚明け、蒲團の上に勘大夫居て」勘太郎「ナイ今頃何をして居るのだ。神といふに拘り」與「ナ、親方お前さん。與、佐、目が覺め被成たか。勘「サア此中は心配で夜も寐られなかつたが其疲れの出たせへか前後も知らず寐入たに耳の端での話聲どうく目が覺めて仕舞た。佐「夫は悪い事を仕舞たつけね。與「然し夫では今の話を勘「サア聞くも附ても濟ぬといふは勘太夫。佐「とは又何で。佐、與、親方が。勘、身の言譯の一通り開てくれ。○おれが初めに畫圖から先へ見たなら斷つて仕舞ものをば手前達を連れて來たのが誤りで濟ぬ者は勘太夫孝行者の與四郎が親を案して泣くも尤思へば此身の誤りから上木様の御息女に迄苦勞を掛る氣の毒さ。與「エ、勘、何も隠すには及ばぬ事日外茶の間の普請の時からおかしなどは思つて居たれを子迄含した程の中とは始めて知つた今の話しお袋も氣遣ひなれば爰が出られるものなればせめて今夜一晩でも言交はしたる名主の娘よ。○イヤ、サ長の病氣の揚句のお袋達してやり度ものなれを所詮爰は出られぬと思へば濟ぬ勘太夫與四郎堪忍してくれ。神「弟子を憐む棟梁の詞に與四郎顔赤らめ。與「親方不埒の所は眞平御免をすつておくんさい。佐「コレ與四郎親方だつて野暮でもねへ夫なればこそ心配もして居

被成のた何と親方寧ろの事今宵こつろり與四郎を出して遣つたら何うでせう。勘「馬鹿といへ何うして脱けて出られるものか。佐「イヤ其所に工夫があり升のサ元は喧嘩で近附になつた折助が今夜の當番やつ等に二三両も摺ませれば二つ返事で聞くは受台何と親方出してやらうじやアあり升せんか。勘「ナ、能くいつてやつてくれたさういふ事なら今直ぐ金三兩は爰に置から。神「いひつゝ取出せ袂の目錄紙引裂て差置。與「モン親方有難はムリ升が今にも檢めがあつた時に居なんだら親方に難義の掛るは知れた事。勘「イヤ夫は氣遣ひしてくるな檢めの其時に返事さへして置けば胡麻化せぬ事もなければ今夜は一先此小家をば。佐「ソレ與四郎親方も深切にいつて下さる事だから往つて來い其代りには夜の明けぬ内に戻つて來ねば朝が面倒。與「夫は勿論承知なれを若しや跡で事でもあつては。勘「ハテ其氣遣ひより夢見ではお袋が氣遣ひをかり且は名主の娘にも。○サア夫は何うでも親丈けには是非共逢て來てくれる。神「深切籠る一言に此方は飛立心の嬉さ。與「親方何にもいひ升せん有難ムリ升。佐「然しわつちは鼻薬をかつて來るから親方何卒與四郎を直ぐに寄越しておくんなせへ。勘「夫で手前は肝心の頼む方へ掛つてくれ。佐「合點です。○與四郎早く來てくれ。勘「コレ靜にせぬ。神「制する詞に心附忍んでこそは出て行く跡には與四郎氣もわく。與「夫じやアか詞にあまへ升て往て參り升があ。の河村は喰らへぬ親仁何うぞ跡は氣を附けてお

くんなさい親の病氣の案じもあれど又お前さんも氣遣いでなり升せんから 勘「夫は決して案じあいで随分途中と氣を附けて往て来い 與「有難うり升餓鬼の内から面倒見た弟子と思つて子の様にしてかくんなさる親方故こんお時には猶更に親の様に思はれて 勘「夫は手めへ斗りではねへ此勘太夫とてお袋から預つた其時分にて白くも天窓の小僧奴が名主さんの娘御と色事でも仕様といふ立派な男になつたかと思へば手前の骸丈でも助てけやり度勘太夫 與「エ、勘「イヤサ勘太夫の事は氣に掛すと少とも早く爰を出ておれに安心さしてくれ 與「夫では往つて参り升からくとい様だが随分親方 勘「手前も無事で免れてくれ 與「今夜はわつちも一生懸命でムり升 淨「と立掛るを 勘「夫じやアモウ行くのう 與「へい親方のお情でお袋の顔が見られるかと思へば腹の内は堪り升せん 勘「さうだらう夫では與四郎 與「親方 勘「猶此上ともお袋を孝行にしてやつてくれよ 與「へい有難うムり升〇「ト時の太鼓になり「ヤわりやモウ四つだ「ト上手より佐太郎出て来り「佐「與四郎都合は上首尾は早く来い〜 與「サ、合點だ〇 淨「身繕ひさへそこ〜に連立てころ「親方往つて来升せ 淨「出て行く後ろ影を延上り見送る胸も安堵の思ひ 勘「エ、忝い是で一つの安堵といふもの夫にしても命に懸けねば親に逢ふ事ならぬといふ無残を斯ういふ目に會ふも皆河村が非義非道思へば憎い奴だわへ〇夫といふも殿様の謀叛の證據は釣天井皆の他出を許さぬも露顯を

厭ふ用心の末には首を刎られると悟つた故に拒んで見たれど大事を知つた者なれど何の道免れぬ命故せめては子分を助けてやらうと受合ふたれど油断のない古狸の河村だけ出られぬ小家の此嚴重聞けば明日が上様のお泊りであるからは大方今夜は切られる事と思へばあれが骸だけでも助けてやり度斗りに手藝を求めて出したる與四郎おれに言附け訴人をさしても飽足らぬ悪人なれど切米頂く出入の大工恩義を思ふて子方の者にもいはせにかつた企ても明日が行ふ日とあれば所詮今夜は免れぬ命「ト上手より佐太郎出て来り「佐「親方柵を越さしてやりやした」勘「夫では人目に掛りもせず 佐「首尾は大極上々吉サ「ト後ろにて△〇□「ナイ河村様のお檢めだ〜 勘「ヤろんから今度の檢めは 佐「河村だといつて居升せ 勘「一筋繩では行ぬ親仁 佐「モン與四郎の事がばれたら 勘「覺悟の通り此身一つを 佐「エ、「ト上手にて」△〇□「棟梁勘太夫子方一統 勘「へい「ト行掛るを佐太郎袖を引止め勘太夫振拂ふのが道具替りの知らせ「皆お檢めだぞ「ト後ろにて」大勢「サ、イ 淨「心ならずも「ト此模様宜く三重にて道具ぐん廻す

城内不淨門夜抜の場

本舞臺半舞臺真中家根附の門の裏を見せ上の方門番所雨戸を建切り上下石垣の高堀松の立木同じく釣枝辻行燈都て城内不淨門の体合方時の鐘割竹の音にて道具納る

ト向ふより與四郎走り出て來り花道に俯臥向ふを窺ふ又向ふより新六走出て來り「新六、チ
 イ與四郎さんく、與四郎、さういふは新六さんか」新「其新六だが暗くちつてさつぱり分らね
 へ與「何爰に居るのだ」新「何だ氣樂な男だせ寐て居るのか」與「何サ曲り角の松の間に人が
 立つて居たから爰迄逃げて來て俯向にちつて居たのだ」新「何ろんなに周章る奴があるもの
 かあれは着物を洗つて夜干にしてあつたのだ」與「ヤレく嬉しやろんなら今のは洗濯物か
 新「こんな危い仕事をば受込んだも金づくでん決してねへせ馴染になつた好身を思つて斯
 うして小家を出したものの、夜明前に歸つてくれねへと首が四つあつても足りねへせ」與「夫
 とおめへ達斗でなく廿八人の人達が身にも關るわつちの骸安心をして居ておくんなせへ
 新「いゝな急度だち」ト引返してこ入る與四郎舞臺へ來り與「へいお頼申升」ト門番所の内
 にて「甚太兵衛」チ、五番長家の富六五もく飯か有難い〇「ト入口の戸を明け」エ、何じや手
 前は與「へいわつちらは御城内へ參つてゐる大工でムリ升」甚「ハ、ア勘太夫の子方の者か〇
 チ、貴様は與四郎ではないか」與「違いないいつかお目に掛つた御門番〇夫ではお前さんが
 此不淨門の御番人でムリ升たか」甚「さうじやシテ貴様は何所へ行くのじや」與「へい大な聲
 での申されぬが實はわつちのお袋が」甚「病氣も大分宜い方どのいつか清瀧での話であつた
 な」與「サア其所でムリ升其宜かつたお袋ではムリ升が此頃の烏啼夢見の惡さが心に掛れど

封じられて出る事が出來升せぬ故寢ず番の仲間衆に譯を話して明七つ迄に歸つて來る約束
 で出して貰ふたのでムリ升が何うか旦那御面倒ながら御門をお願ひ申升」甚「夫は通しても
 やり度けれどお上から差留られて居る大工故氣の毒ながら通す事はならぬ」與「ろんなら何
 うでも此御門は」甚「決して意地悪るるのであいで」ト與四郎小判を三枚出し」與「モン
 旦那取て置ておくんなせへ」甚「ユウく是は小判三枚あるが何うするのじや」與「誠にちよ
 つびらでムリ升が甚でも買つて上つておくんなさい升せ」甚「馬鹿な事をいつたものだ三兩
 の甚を吞て見さつしやい大海で味噌汁の行水でも使はねばならぬがな〇エへ、夫は無
 與四郎さん心配じやな假令足輕頭でも大小させば先侍じや其侍が情を知らぬでは今日様へ
 濟ぬ宜しい通らつしやい」與「エ、そんなら通しておくんなさるのか」甚「サア決してならぬ
 所なれど此三兩では〇エへ、金は決して欲くはなけれど親孝行の邪魔しては濟ぬじや
 て若しか咎があつたなら寐て居た内に通つたといふたら事が濟むであらう」與「夫ではモウ
 か休み被成のでムリ升の」甚「サアモウ寐ると仕様か」ト與四郎又小判一枚出し」與「モン是
 は少つと斗りですが」甚「何じや又小判一枚の」與「鼻紙でも買つておくんなさい」甚「馬鹿な
 事をいつたものだ一兩が鼻紙で鼻をうんだら鼻がちぎれて仕舞うがなエへ、與「其所
 でわつちも明七つ前迄には必らず戻らねばなり升せぬから何うか夫迄起て居てお貰ひ申譯

には行升まいか 甚「ア、大事な何時迄でも起て居升○所でモウ外に頼みはないかな 與「
 イエ夫さへお頼み申て置升たれば 甚「何ぞ尙外にありうな物じやな 與「チ、あり升た
 甚「べたり又一両か○イヤサ一度でも二度でもたんと頼んで置つしやい手前は藏でも建る
 からエへ、、、 與「其お頼みは外郭へ脱け升には何う往たら宜うムリ升せう 甚「夫と秘密
 を教へて進せよう○ンレ此向ふに松の並んだ土手が見へるであらう其右の方の松の木の枝
 が垂れてある夫を印しに土手へ上ると其下が外畑で材木がつかつて居るら夫を飛々に向
 ふへ行かれるのじや 與「ろんから直ぐに其所を渡つて 甚「行なら傳授の禮があらうな 與「
 モウ暇取ては 甚「エ、 與「旦那戻りを頼み升せ「ト小門より後ろへ走りこ入る「甚「何だ只
 かひどいなア「ト此模様宜く時の鐘早めの合方にて道具ぶんど廻す

鹽谷村名主藤左衛門邸の場

本舞臺常足の二重本椽附見附床の間違柵墨畫の唐紙前側障子上手障子家体下手跡へ寄せて
 塀の裏を見せ此内三尺の開戸此前松紅葉の立木石燈籠例の所切戸都て村名主邸奥の間の体
 時の鐘を打上げ獨吟にて道具納る

ト障子を引抜く爰にお米傍にお仙懷劔を鞘に納め居る上の方に短檠を灯しありお仙「一寸お
 傍を離れると直ぐは此様を危い事を遊ばし升てお米「夫じやといふて所詮此世に生長らへて
 居られぬ身故 仙「貴嬢を死さす程あればお仙も苦勞の致し升せぬわいなア「ト奥にて「藤左
 衛門「お仙のからぬかお仙「く仙「ヤあのお聲の旦那様「ト懷劔を隠す藤左衛門出て來り「藤
 左、お仙是にかつたか娘の泣泣てゐるか 仙「イエ「くお泣遊ばしていのムリ升せぬモウお
 休みが宜しからうと申てゐる所でムリ升る 藤「夫では又我儘を申かゝるか 仙「何の我儘を
 おつしやり升せう 藤「イヤ「くいはぬ事はあいコリヤ娘篤くりと承れ○此藤左衛門は十餘
 箇村の束を致す名主よて其娘が身持放埒○コリヤ其相手は大工の與四郎左様お者と忍び合
 憎いやつとば思へども妻は産後に此世を去り不便と思ふて心の儘に成人させしが親の誤り
 先達ても申た通り儘の知行でも貰ふ身分の者なれば聳養子にも致さんなれど大工づれば聳
 には取らぬと申聞せしより此病是がじたい我儘病と申もの○とサ阿り度は山々なれど阿ら
 ば病も重らうかと案じるも又親の因果○何うぞ彼を思ひ切り外に聳を取てくれ 米「ア、モ
 ン爺さん親への不孝家の疵能う辨へてはかり升れど枕交はせし與四郎さん貴爺に何と申譯
 の致さう様もムリ升せぬ 藤「其心が附たなら他より聳を迎へてくれるか 米「夫斗りは堪忍
 して被下升せ 藤「スリヤ事を分け申聞ても 米「與四郎さんの事斗りは思ひ切られ升せぬわ
 いなア「ト藤左衛門立に掛るを 仙「旦那様屹相して何と被成升ぞいなア 藤「不孝をやつ故
 是非がない藏の二階へはり上げて仕置を致にや相成らぬ 仙「サ、其お腹立も御尤ではムリ

又其内に「ト立に掛る」米「ア、モン待て下さんせ私しや腹が立た故」仙「今の様にいふたれ
 を命懸との今の詞」米「聞て貴君のお身が氣遣ひ」米、仙「何うぞ聞して下さんせ」與「イヤモウ
 いとぬ〜」米「其様な意地の悪い事をいはずと」仙「話して聞して下さんせいなア」與「そつ
 ちが聞ぬとあればこつちもいはぬ〜」仙「今のは私が誤る程に」米「譯を聞かして」米、仙「下さ
 んせいなア」與「譯といふは聞てくんねへ」實は逃る覺悟故餘所ながら暇乞に親方の所へ往
 た所河村様迄一所に來いと連られて往たをれを約束の事がある故透があつたら逃様と思つ
 て居る内此普請が出來すれば御褒美は知行でも何でも望み次第との詞とこつちの願にて侍
 にさへなつたら筆になれる事と思ひ夫斗りが楽しみ今迄城に居る内の難義は口でいはれ
 ぬ程いとい目に合つたのサ」米「シテ其難義といはしやんすは」與「サア實は見張の附斗りう
 夜るは出入を止めらる其檢めの嚴しさは丸で火附の罪人同様便りをする譯にも行す只くよ
 く〜と思ふ斗りユレか米さんか前の事が氣に掛り内の敷居を跨ぐや否心も空に來て見れば
 恨みは無理ではなけれ共さういふ目に逢つたのも侍になりたい斗り河村といふ家老が自筆
 に書た此墨附是を握つて居るからはモウおとつさんも筆にせぬといはれまい今迄が大工
 だどあんまり人を見くびるを百石取のお侍様だ」ト墨附を出していふ」米「そんなら嫌はれ
 たかと思ふて居たに」仙「さうした譯で」米、仙「ムんしたかいなア」與「サア侍になりさへした

らか前も死には及ぶまい又欠落は無駄な事さうじやアないか」仙「ア、さうでムんすわいな
 ア且那樣も大工づれを筆にせぬとはお身を高振つた申分ではムり升せぬか知行取なら筆に
 するとのお詞は反古にさ〜ぬ私が證人」米「爺さんのお心では與四郎さんを是程か人にな
 いと思ふていムんせうが今は自慢の私の夫餘も彼此はいはしやんそまい」仙「何の私がいわ
 し升せうモン與四郎さん此墨附を貸て下さんせ且那樣に見せ附けて御夫婦にぞるかせぬ
 サア何うじやと取極ねばならぬわいなア」與「サア持て行なさい」○だがモウ何時たらう」仙
 まだ夜中過でムんす故久し振りて今宵はしつぱり」與、米「エ」仙「イエ」暫しの間御介抱を頼
 み升わいなア」ト奥へこ入る」米「モン與四郎さんさういふお前の心と知らず今の様にいふ
 たのは何うぞ堪忍して下さんせへ」與「さう機嫌が直つたらこんな嬉い事はないのサ」米「夫
 にしても命懸けで忍んで來たとは何ういふ譯でムんすぞいなア」與「何夫のわの」○「ト心附
 き」イヤ是はいられぬ事だ」米「何言れぬとは」與「決して他言をせぬといふ血判を取られた
 からは人に話の出來ぬ普請」米「何んを普請か知らぬ共貴君のお身が案事られる故」與「エ、
 しつこいじやねへか」米「そんなら聞いでも宜うムんすわいなア」與「何もそんなにしらせな
 くつても宜い」米「そんなら話して下さんぞか」與「斯ういふ譯サ」○じたい新御殿を建るに附
 てお上から圖面を出した其普請も出來上り明日が江戸の親玉には宇都宮泊り故夫が濟たら

仲間一同褒美をくれて戻すであらうと夫斗りが樂みサ米「さうして其普請といふは與「釣天井といふもの故是が人にいれぬ譯サ米「レテ釣天井といふものは與「先早くいつて見ると天井を二重に拵らへ其一重を綱で釣上げイザといふと綱をゆるめ天井が下つて上で人形を踊らす機關夫で誰にもいはずに居て將軍様へ出抜けに見せて悔りさす趣向だと思つて居るのサ米「成程さうでムんせう夫聞て安心したわいなア「ト是を雞笛になり與「ヤアモウ夜明にはエ、お仙どんが夜中過だといつた故心をゆるして居たのだが今のは櫓の七つのお太鼓〇時が遅れた黒附く米「何も其様にせかいでも宜いではムんせぬかいなア與「イヤ急かにはや振けて出て來た故時遅れては皆の難儀何かの話は寛りと米「必ず待てかり升どへ與「したがあの黒附を確りと米「アイ預つて置わいなア與「夫では勝手覺へし近道米「與四郎さん與「ドレ駈附やうか「ト向ふへ走りこ入る奥にて「お仙「サア旦那様逢て上て被下升せいさア「トお仙藤左衛門出て來り藤左衛門「娘出かした出かしかつた米「さういふは爺さんお仙「お悦び遊ばし升せ旦那様がかつしやるには與四郎と手柄者娘も能う惚れかつたと夫はく強いお悦びでムり升わいなア米「そんなら爺さん與四郎さんと藤「女夫にせいでならうかいやい此黒附は河村殿の印判に紛れないレテ與四郎は何れにおる米「今お城へ戻つてムんしたわいなア藤「何じや城内へ戻つたか實は何ういふ手柄にて此褒美に

預つたか娘其方は聞かんだか米「委う聞てかり升わいなア「其の黒附を頂いたの上様お泊り遊ばそ御殿の普請は釣天井と申事藤「何釣天井とさ米「夫が上様に御覽に入れるお慰みの趣向とやら仙「夫はマア上様にも御意に叶ふでムり升せう與四郎さんが戻つたも其御用か但し此御褒美の事に附て藤「イヤ全く左様でない不便や大工與四郎には當家の筆になり度斗りに工みの畏に落入て命を棄に戻りしか米「合點の行ぬ命を棄に米「仙「戻りしとは藤「此度の新御殿の恐多くも家光公を殺さんと謀りし本多の叛謀今顯はれし釣天井米「仙「エ、藤「コリヤ能承れ〇過し慶長五年の役に神君には水口に一泊の夜城主夏川大藏太輔石田に一味し家康公を釣天井にて殺さんと謀りし初事の露顯を防がん爲大工は悉く殺し尽せり米「仙「エ、藤「其臣野村長兵衛が密告なせし鈴鹿の御難思ふに附けても本多が隠謀夫を悟らず與四郎が引返せしは運の尽不便な事を致したわいな米「スリヤ上様を殺さう爲の仙「御領主様の御謀叛でムり升たかヤアく藤「夫に同意の河村鞆負能も味く計りかつたな米「南無阿彌陀佛「ト懷劔を咽へ突立る仙「ヤお嬢様に藤「何故の生害なるぞ米「此身の自害の與四郎さんへの身の言譯藤「何と申藤「親よ不幸の淫奔から胤を舍して欠落と約束せしも絶へて來す今宵逢ふて様子を聞けば只侍になりたいの一心よりして今の成行何うと爺さんお情に未來は女夫にして下さんせいさア藤「チ、尤じやあの與四郎を悪人共

の手に掛けて殺すも身共の片意地ならし箇をしてくれ其代りには未來永劫娘中宜う添てくれ
 仙「斯いふ事をさせ升まいと御意見申た甲斐あつて此愚附にて御主人様にも夫婦にとると
 の嬉さお詞夫も暫しの間に又悲しさの此御自害 米是迄其方にもいかひ苦勞を掛升た何
 ぞわたしが亡跡も爺さんを頼むぞや 仙「モン旦那様與四郎さんといひお嬢様のお痛のしい
 お身の成行思へば憎い御領主様將軍様を殺さんとは 藤「コリヤ靜かに致せ明日御着になら
 ぬ内上の大事を訴へん」ト視箱を持來る「米、ろんなら爺さん貴爺には 仙「御領主様の企て
 をば 藤「告奉るが上の手で駕の娘の敵討 米「夫にて夫の御無念も 仙「お嬢様のお恨みも
 藤「晴すは親が直訴にあれば心残さず成佛してくれ 米「エ、忝い」ト落入る「仙「ヤコリヤ
 モウ事が藤「チ、〇衣服を持って 仙「ハイ」ト藤左衛門紙を開くが木の頭まで訴狀を認める
 此模様宜く早めの合方にて道具ふん廻と

柳の井戸大工斬捨の場

木舞臺手舞臺後ろ石垣草土手の書割下手皆蒸たる石の角井戸柳の大樹松の釣枝上下植込都
 て城内柳の井戸の体爰に河村床机に掛り勘太夫佐太郎繩に掛り足輕二人繩を捉り一の瀬白
 鞘の抜刀を持仲間手桶の水を掛け居る後ろに足輕四人扣へ首のさき大工の死骸積上げ高
 張提灯を建あり此模様雞籠床の三重にて道具納る

添る「開けて行く夜も早既に東雲の曉告る鶏の音に争ふ人の泣聲も次第に絶て亡骸は累々
 として山をなし鮮血溢れて海の如く見るに目もくれ心消へ魂も飛ぶ斗りあり 一の團「サア
 佐太郎與四郎を何れへ遣たサア早く白狀致せ佐太郎「何といつて尋ねても知らねへ事は知ら
 ねへのだ何ぼ上の役人だつて使ふ丈け使つて置て普請の手放になつたからといつて能くも
 覺へのねへ罪を負して仲間のやつ等を殺しヤアがつたなア」親方モウ斯うなつたら仕方が
 ねへからお前さんも覺悟をして下さい升せあの與四郎が逃げてくれたは嬉しいがあんな正
 直な奴だから歸つて來るは知れた事歸れば直ぐ殺されるかと思やアわつちの可愛想で死
 んでも夫が苦になりやす〇といつた所で仕方がねへサア殺せものならずつばりどやつてく
 れる」チ、白狀せねばせぬて宜い覺悟の通り悪事の成敗」ト佐太郎の首を打落す河村「最
 早跡に残りしけ勘太夫一人に止つたり只残念なは與四郎なる奴ヤイ勘太夫たばねを致す其
 方が行衛を存せぬ事はあるまい隠さば彌り殺しに致すぞよ 添「嚇し掛れば頭を上げ勘太夫、
 イヤ存せぬ事は何處迄も 河「ヤ番の小者が佐太郎の頼に因て出せしどの事左すれば其方
 が差圖に相違ないわい 勘「其佐太郎さへ存せぬ者と何で私が存じ升せう」ヤア猶も責問
 ひ白狀させんが最早夜明に近附たれば先供の諸大名乗込んだれば事の妨げソレ引立よ皆々、
 心得升た 添「引立んとする其所へ與四郎引立足輕共 與四郎「親方達者で居てかくんなさつた

か 淨「いふに悔り面を上げ 勘「チ、與四郎か河「出かした者共 主「引け足懸「きりくうせ
 う「ト舞臺へ来る 河「繩打て足懸「ハツ〇神妙致せ 勘「コレ與四郎手前斗りはと思て居た
 に矢ッ張繩に掛つてくれたか 與「わつちの往つて來やしたが夫も明けてはあらねへと御城
 内のご入小口で熊手をたぶさへ引掛たは扱は事がばれたかと引れて來たも此與四郎から親
 方始め仲間の手合又難義を掛けては濟ぬ事だと思つた所お前さん迄此繩目仲間の者は何う
 仕升たお前さん斗りでムり升る 勘「イヤおれ斗りじやアねへ廿七人の其内でも佐太郎が氣
 に掛けて正直者の手めへ故今にも歸れば殺されるが不便でならぬと苦にして居たわいッレ
 見よ二十七人其所に揃ふて居るわい 淨「いふ又與四郎愕かしく見れば山なそ仲間の死骸
 與「ヤ是は皆首を切れたのか城を脱け出たお仕置なら此與四郎に科有て外の手合は知らぬ
 事「一黙れ今晚お金藏の金子を奪ひし盜賊あつて大工一同檢めしに何れもお家の極印の小
 判を所持致すからは其盜賊に紛れなし 河「首を刎たは賊の成敗汝逆も免れぬぞ 淨「思ひ設
 けぬ一言に與四郎の惘れ果 與「モン御家老さん金を盗んだかんどは寐耳に水の其疑ひ
 河「扣へからう汝數多の金子をば所持なすこそ賊の證據門番大竹甚太兵衛へ與へし金の事
 迄も上には詮議が届いてあるわい 淨「物をもいはせず天窓より囁附ううな權柄に與四郎は
 氣を吞れ 與「イヤモン御家老さん無理にも程のある詮索じたい其金といふは目錄や骨折代

呂に下さつた金斗りも大きな事夫も小家を出さぬ故皆持ないで何と仕様 河「ぬかす此奴
 金をくれた覺へはないぞ 與「何かい事があるものか血判取た其日から 河「エ、物をいはさ
 す討て仕舞へ「心得升た 淨「刀押取り振窮せば 勘「ア、モン待て被下升せ〇コレ與四郎
 モウ何にもいつてくれるなせめて手前の命だけでもと出してやつたに手前は何で戻つてく
 れた斯うある事は目の前に分つた非道の此成敗 與「シテ又何で大工の者をば 勘「殺さじや
 謀叛が露顯するわい 河「何と勘「河村様アモ恐しい工みを被成升なア〇初て畫圖を見た時
 より釣天井にて上様を失ふ企と悟つたれと出入の殿様を訴人する譯にも行ず命をば何の道
 とも取らるゝと覺悟極めた普請の受合なせ殺さすならぬ者なら得心さしては下さらぬ賊
 の汚名を奪り附け殺さうとは非義非道此恨み斗りでも何の謀叛が成就仕升せうか 淨「上
 を誹りし悪口を聞くに堪へぬ河村鞞負 河「ヤア非義非道とは無禮な奴臨終の際に申聞けん
 〇此度主人の御謀叛の全く利慾の爲めにあらす主人忠長公の辱しめを臣として見るに忍び
 ず故に三代公を討奉らんす上の隠謀何ぞ不忠不義といはん 淨「いふに與四郎切齒をなし
 與「エ、知らなんだくさう聞く上はあの百石の愚附も此與四郎を欺したのか夫ど知たら
 仲間の敵訴人なして遣うもの知かんだが口惜い〇 淨「残念さよと眼に激く涙も赤けに血走
 る顔色「イヤモン親方此與四郎より親方の命が助けて貰ひ度がるんな河村の根性ならさう

いふ始末にやアなり升せん○エウ河村の親仁め此世の桁を盗んだる死損ないの狸親仁め天下の爲にやア不忠の獄卒祿盗人の蟹親仁サアすつぱりどやつてくれ○然し母者人が心掛り○エ、夫も駄目だサアやつてくれ 勘「そんなら手前も死ぬ覺悟か 與「是も領主の悪心から 勘「可愛や廿七人には 與「非道の刀に命を取る 勘「報ひがあるかないものゝ 與「今に身に 知れ勘、與「河村鞆負河、無禮者め、情用捨も河村が閃かしたる刃の下首は前にぞ落にける河、 何うじや年は取ても河村鞆負味く切たなア皆々、お見事にムリ升る 河「まだ、是では戰場の血の雨降らそに○「ト拔刀を突出そのが木の頭「後れはせぬわい「ト此仕組宜く誂らへの合方にて柏子慕」

七幕目

役人替名

- | | |
|-----------|------------|
| 一 石川 八左衛門 | 一 長 坂 建之助 |
| 一 上木 藤左衛門 | 一 水 野 徳太郎 |
| 一 近 藤 登之助 | 一 早 見 貞藏 |
| 一 三代將軍家光公 | 一 造 酒屋 文太郎 |
| 一 角力取 猿ヶ股 | 一 手 代 喜七 |

- | | |
|-----------|-----------|
| 一 稻 葉 伊豫守 | 一 井 伊 掃部頭 |
| 一 孕 石 豊後守 | 一 足 輕 大 勢 |
| 一 市 岡 主 税 | 一 諸 士 惣 出 |
| 一 篠 塚 大 藏 | |

日光街道の場

本舞臺二階造り目詰をしたる格子下手大戸を建切真中潜戸此下の方荒格子力石置あり家根に杉の酒林此下手百姓家前側の引戸上手宿の場末の片遠見石橋驛の傍示杭松の釣技都て石橋驛棒鼻の体爰に席を敷猿ヶ股喜七立掛居て馬士唄にて幕明く

猿ヶ股「モン旦那さんか先手のお道具が見へるぞ、早う、潜の内より文太郎出て来り「文太郎、さうかく、イヨウ大層を御同勢じやなア喜七「猿ヶ股、お道具は誰じやあ猿、あれは先のが南部信濃守様で次が丹波五郎左衛門様じや、旦那さん跡に見へるが酒井雅楽頭様でお家柄でムリ升るな 文「猿ヶ股は委いものじやな 猿「夫のあんた江戸に居る時元日の総登城などを見に行升たからお道具は覺へてお升のじや○ハ、二番手の端は有馬玄蕃様じや次が諏訪因幡守様じや 文「是は感心者じやあア喜「夫でこの次へ見へるは猿、あれは青山大藏太輔様次が小笠原左京太夫様じや 喜「是は所詮叶はぬ 文「跡が見へるぞ

くおきは仙臺の殿様じや 喜「是は旦那の大當り關も土俵を割そうか三人」アハ、、是は大笑ひだ 「ト上手より藤左衛門走り出て來り猿ヶ股に行當る」猿「エ、何をさらすのじや藤左衛門」是と龜相致したシテ將軍家にもお着に相成しかまだでムるかお着でムるか 文「サア上様にも程なくお着でムり升せう 藤「シテ井伊掃部頭様には 喜「井伊様は大方跡供でムり升せう 藤「スリヤ將軍家にも井伊公にも○左様でムるの○何うか水を一盃御無心が致し度 文「コレ猿ヶ股水をお上げ申せ 猿「ようムり升「ト内へこ入る」文「先是へお掛被成升せ 藤「中々左様に致しては 喜「モン向ふから來る一本道具は 藤「何一本道具と云ふ 文「慥か掃部様じや」 「ト猿ヶ股出て來り」猿「股」チインよ水 藤「ろこそ所ではムらぬわい」 「ト狼狽て向ふへ走りこ入る」猿「何じやわいつは 喜「本氣の沙汰ではない様な 文「イヤ様々のお通りがあるわい三人」アハ、、 「ト向ふにて」近藤「是サ石川來いといふに○」 「ト近藤登之助石川八左衛門の手を引張り出て來り」如何にお供とはいへ中食に飯斗りとは下さらぬ一盃やるから來いといふに石川「是は又迷惑千萬 近「ハテ下戸でも同じ旗本の附合向ふの酒林迄參らうといふよ○」 「ト舞臺へ來り」コリヤ酒を一盃吞してくれ 喜「へいではムり升るが今日はお成に附商ひを休んでおり升れば 近「夫では賣らぬと申か 文「イヤ差上ぬではムり升せぬ」居酒は御法度でムり升れば升賣で宜くば 近「チ、升賣で宜いぞ 文「シテお入物は 近「

爰にある」 「ト腹を叩く」喜「夫では矢張召上るのでムり升るか 近「呑む爲の酒でいかに 喜「左様ではムり升れど居酒はお上よりの御法度でムり升る 近「夫れなれば苦うない手前共は旗本寄合の者なるぞ 猿「ハ、ア夫ではお旗本でムり升るか 石「如何にも將軍家のお供を命せられたる某事は石川八左衛門と申者 近「又手前は近藤登之助 文「夫では内證で差上るでムり升せう 喜「然しか肴もムり升せず升酒でも大事ムり升せぬか 近「イヤ升酒結構肴には盃を持って來い 喜「シテ何程差上せう 近「先一升跡は追々申であらう 文「エ、御酒を一升 猿「ゑらい大酒と見へ升な 喜「イヤ直に差上せう」 「ト内へこ入る」石「近藤氏手前をバやつてくれては何うだ 近「ハテ宜いわサ附合給へ 石「コリヤ困つた者である」 「ト内より喜七出て來り」喜「左様なら 近「チ、御苦勞」 「ト升を受取る」喜「盃は只今持て參り升る 近「何うせ跡を頼むら其時に持て來い」 「ト升の隅から香掛る 石「イヤ憫れたものだ 文「デハ旦那は御酒を上らぬのでムり升るか 石「身共は不得手だ其代りに一升の飯も喰ひ餅なら大切六七十は喰ふであらう 文「夫はお見事でムり升るお然し失禮ではムり升れど今日のお通りを拜み度とて在方から參り升ので夫へ馳走に餅を搗升てムり升るが阿部川餅は如何でムり升る 石「夫は結構馳走になつても宜らうか 文「イヤモウ召上つてさへ被下升れば手前方の面目でムり升る 近「ア、甘露」 「○モウ一杯 猿「夫では酒は私か量つて來升せう 喜「

滅相な劔呑く 文「成程是は餅の使なら大丈夫だ猿ヶ股は餅とか茶を持って来るがよいわい
 近「イヤ是はゑらい使じや 近「ドレ量つて参り升せうか」ト兩人内へこ入る 文「シテ上様
 には今晚は宇都宮のお泊でムリ升るか 石「如何にも本多殿の願に因り今晚は宇都宮の城中
 へ御一泊との御豫定 文「夫でこ今晚は召上り升せうか 近「元より今晚は腰を居へて吞ねば
 ならぬのじや 石「能吞たがるに恐入た 近「貴公の能く喰たがるにも恐入た今も聞けば阿
 部川餅とやらを石「實之當家へ無心を申た 近「是が所謂武士は相身互ひといふのか 石「近
 アハハハ」ト内より猿ヶ股餅を持出て來り」猿「アイ旦那様お上り被成升せ 石「是ハ澤
 山に持て来てくれたな」ト喜七升を持出て來り」近「エイお替りを持て参り升た 近「ナ、待
 て居たく」近「中々旦那は能お呑でムリ升るな 近「天下の英雄は皆斯様な者じや下戸の豪
 傑は餘り聞かないぞ 石「是は少と耳が痛いわい 近「イヨウ石川阿部川餅の手の内を見せて
 くりやれ 石「下戸の手並を見せてやらうか」ト力石を片手にて輕々しうさし上げて「何
 うだ此位なものだ 文「コレ猿ヶ股か力を見たか 近「此真似は出來まい 猿「ゑらい力でムリ
 升な 石「何是しきは朝飯前の茶漬だ 文「旦那様其石之手前方の先代がさした後はさす者が
 ムリ升せぬ故手前方は力石の酒屋と通名になつてかり升るが貴君はゑらい御力量でムリ升
 るな 近「夫は此石川といふ男は旗本中での力強何うだがちやばへ石川と一番取て見ぬか勝
 たら二升買てやるが 近「貴様も天下の力士であれば 文「お願ひ申たら何うじや 近「取て見
 い」石川何うじや 石「阿部川餅の腹すかし取て見様かな 近「取々 猿「ろんから勝たら
 酒二升 近「負たら何うとる 猿「二升買升せう 石「面白い近藤氏行司の貴殿だぞ 猿「待て
 く」ト宜く身構して角力になり色々あつてト石川見事に投げ」石「何うじや○」ト手を
 上るのが道具替りの知らせ」二升買へ」ト此模様宜く馬士唄にて道具ふん廻す

石橋驛本陣玄關先の場

本舞臺真中玄關軒の紫の紋幕盛砂切手桶上下跡へ寄せて塗塀此前白の紋幕松の釣枝都て本
 陣玄關先の体二重に孕石豊後守平舞臺に市岡主税篠塚大藏居て合方よて道具納る
 孕石「是はく御丁寧なる御挨拶其由主人掃部頭へ申達るでムリ升せう市岡「シテ今晚將軍家
 への御挨拶は旅中の衣服にて宜く候や篠塚「拙者主人に於ても井伊公へお伺ひ申せとの申附
 に因り罷越してムリ升る 孕「其義は只今主人に伺ひ使者を以て御返答仕るでムリ升せう市
 何卒好きにお願申す 篠「左様ムらば孕石氏 孕「お使者御苦勞に存じ升る」ト兩人橋掛へは
 入る向ふにて○、△「不禮者下れ」ト下り升せう」ト侍二人藤左衛門を支へながら出て來り
 藤左衛門「不禮の段は恐入れ共何卒井伊公へお目通りの儀を○「ヤア何れの御藩の仁かは知
 らねど △「御大老へのお目通りとは叶はぬ事 藤「其所を何卒○、△「エ、下り召れと申」ト

舞臺へ来る 孕「ヤア此所を何と心得立願ぐぞ將軍家か小休みの御本陣あるぞ 藤「ハツハア、○「趣意の何の存せね共狂氣に等しき是なる老人△殊に井伊公へ御目通杯とは以の外の義にムれば ○△支へ升てムリ升る 孕「スリヤ我主人へお目通を 藤「ヤ、其許様には井伊公の御家來にムるよな 孕「如何にも井伊家の老臣にて孕石豊後守と申者 藤「其許様に御意得升たは一心通りし悦ばしさコレ娘與四郎今又敵は取てやるわい 孕「何様後前さ揃はぬ詞の体では狂人なるべし 藤「狂人とはお情なし只天下のお爲を存じて態々罷越したる者 孕「何かは存せず天下の爲とは捨置難しお手前方には引取られよ△「左様ムれば我々に○△「差扣へるでムリ升せう「ト橋掛へて入る」孕「シテ其許の御姓名は 藤「拙者事の則本多殿の御領分鹽谷村の名主にて上木藤左衛門と申者一大事を御訴に出升てムリ升る 孕「何一大事とは 藤「ハア、則天下の一大事にムリ升る 孕「ム、ト奥より早見貞藏出て來り貞藏「御家老へ申入升る只今主人洩聞給ひ直々對面致すとある仰せでムリ升る 藤「スリヤお目通りをお許下されんとな 孕「某案内致とでムラライザ名主 藤「お供致とでムリ升せう 貞「御案内仕らう「ト貞藏案内して橋掛へて入る孕石の奥へて入る向ふにて「近藤「否たく「ト近藤石川出て來り石川如何に酒呑の世話と下戸が致すと申た連毎度是に懲りておるわい 近「イヤ腹の蟲の得心する迄呑ねば武士が相立ぬ 石「何をたはけたムれといふに○「ト舞臺へ來り

「ヤア近藤暫くの間寐るが宜い斯程迄大醉致されて万一凶變生じおば何とせらるゝ是でも御用に相立か 近「ヤイ石川失禮千万な事を申さ酒で御奉公を怠つて済むか 石「濟ぬに因て申のだ少と慎み給へ見る者が皆笑つておるぞ 近「何天下直參の旗本近藤登之助を笑つたとは不届千万是へ出せ叩き切てくれよう 石「是としたり何う致したものだ將軍家の御旅館は取も直さず殿中同然 近「ヤ 石「帶劔に手を掛けて濟うと思ふかエ、○「ト下に突居へるが道具替りの知らせ「だ、け者め「ト此模様宜く馬士唄にて道具ぶん廻そ

石橋驛本陣庭先の場

本舞臺高足の二重本棧附軒口に紋幕見附金地の襖上下に金展風真中に三段の石の沓脱橋掛家根附の門都て本陣座敷の体二重に井伊掃部頭椽側に孕石平舞臺に藤左衛門居て合方にて道具納る

井伊「鹽谷村名主藤左衛門とやら近習一統遠遊たれば訴の義を 藤「恐れながらまた御家老様がお残りでムリ升る 孕「スリヤ豊後守にも退座せよといはるゝか 藤「只今連も申如く天下の一大事にムリ升れば 井「如何なる秘密の義なりとも苦しうない是なるは予が腹心の老臣なるぞ 藤「ハツ妨げなしとの御意なれば憚りながら取次をお願申上げ升る○「ト前幕の黒附を出す 孕「シテ是なる一書は藤「夫ぞ天下の一大事にて今宵に迫る將軍家の御急難 井「

其書面是へ 孕「ハツ 井「一此度新御殿普請成就の上は御褒美とて其方望みの通り百石下され武士に取立遣はす者也(與四郎へ河村鞆負判シテ此河村鞆負とは 藤「本多殿の御家來にムリ升る 井「シテ又與四郎とは何者あるを 藤「其者義は拙者の聲にムリ升る 井「シテ是なる書附を以て將軍家の御急難とい 藤「趣意は是を御披見被下升せう(ト訴狀を出し掃部頭見て恟りおし) 井「ヤコリヤ本多上野介には 藤「恐しい工みでいムリ升せぬか 井「コリヤ藤左衛門進めく 藤「ハツ 井「シテ其方よの如何致して此釣天井の工みを知たぞ 藤「夫に附て悲い譯の一通か聞被成て被下升せ○此藤左衛門が一人の娘水の出端の若氣より忍び合ふた其男は大工勘太夫の弟子職人で男振なら氣立なら娘が惚たも實の尤 孕「コリヤく一大事ではムらぬか餘事の取置き要用を申されよ 藤「御尤く其男の與四郎も棟梁勘太夫の外廿八人新御殿を設る辻城中へ留置れしは工みの洩れぬ本多が用心昨夜與四郎が密に参り娘に告し話といふ其黒附の様子では疑もなき謀叛の企て與四郎城中へ歸りしからは切れて死るは知れた事夫を悲しみ娘には自害せしも誰故ぞ皆本多殿の反逆より事の起りし娘が成行親の心の悲しさを御推量被下升せ 井「スリヤ大工より聞しとあるか 藤「娘に告しを又聞とは申ながら證據は則其黒附 井「ム、能も急訴を致したり本多上野介謀逆に紛れなし露顯と知らば討て出なん君の御大事今此時迂濶には口外なし難し先藤左衛門には當驛の宿役人に

預け置き守護なす様宜きに計らへ 孕「委細畏てムリ升る 井「其方こそ大切なる證據人本多方にて目を附んも計られねば油斷致すな 藤「其義の仰せ迄もなく聲と娘が仇敵首を見る迄藤左衛門滅多に油斷は仕らぬ 井「夫も近きにあるべきぞ 藤「有難ムリ升る 孕「イヤ藤左衛門 藤「万事上の思召に隨ひ升るでムリ升せう(ト兩人橋掛へは入る 井「容易ならざる本多が隠謀是も必定駿河殿の(ト此以前上手柴垣の蔭にて石川様子を聞居て顔を見合せ)「御邊は石川八左衛門石川御大老 井「夫に何を致しかりしぞ 石「井伊公の御意見を承らんと存じ升て 井「何意見とは 石「逐一聞し本多が隠謀 井「コリヤ○スリヤ只今の様子をば 石「承つてムリ升る 井「忠義に厚き其方なれば苦しうらす 石「君を弑し奉らんとはいはう様なき極重悪人シテ井伊公の御賢慮は 井「左れば本多上野介には才智勝れし者といひ万事掛引太夫の河村鞆負が附添おれば手ぬかりの事は致されず因て江戸御留守ある 安藤對馬守の使者を拵らへ御母公御不測の由を早馬にて告知らしめ御名代として板倉内膳正を日光へ遣はし上様には御蔭人にて松平越中守を以て御乗物に乘しめ引返しなば本多河村此手へ討手を向るは必定 石「シテ將軍家の御尊躰は 井「松平越中守が乗物にて密かに御歸城なさしめん 石「シテ其守護の人々には 井「御旗本に限るべし 石「其義なれば身不肖なれど某守護なし奉らん 井「如何にも御邊の力量を一騎當千の頼みあり君の御身は預る間今より直に御供せられ

よ石「委細石川長つたり非「然し途中氣遣ひなれば石「滅多に油断は仕らじ非「一世の忠義は袋でふるぞ石「左様ムらば御大老非「石川○「ト顔を見合そが道具替りの知らせ」早くくく「ト此模様宜く早めの合方よて道具ぶん廻す

栗橋在諏訪の森の場

本舞臺正面諏訪社の後ろを見せ上下杉林百度石傍示杭都て栗橋在諏訪の森夜の体真中に乗物を置覆面の侍八人上下に別れ長坂建三郎水野徳太郎乗物を守護なし陸尺徒士大勢立掛り居る合方にて道具納る長坂「ヤア何奴なれば途中の狼藉水野「松平越中守が乗物へ慮外致すは憎い奴長「うぬ等一々刀の錆に長水「致してくれん八人「何を小瀬な「ト是を立廻り宜くあつて向ふへ追ふてこ入る直ぐに上手より覆面の侍四人出て来り乗物を目懸て突うとそる上手より石川出て来り四人を投退け石川「ヤア此駕へ手向ひなせば汝等残らず命がないぞ皆々「何を小瀬な「ト宜く四人を下手へ追込む戸家上下にてかすめぞんくありやくの聲聞へる石「エ、お陸尺くく○「ト覆面の侍大勢出て来り立廻り宜くあつて皆々を向ふへ追込み斯る御大事の場合に及び君のお傍に一人も有合さず此上と少しも早く「ト乗物を擔ぐのが木の頭此模様宜く早めの合方にて拍子幕「ト跡時の鐘にてつなぎ後ろの道具出来次第早幕にて引返す

て引返す

桔梗門の場

本舞臺正面に見たる擬寶珠欄干附の橋此見附追手の城門上下堀を隔てし城堀此前草土手の見切松の立木都て桔梗門外夜明前の体爰に足輕二人立掛居る時の鐘太鼓にて幕明く
 ○「此度の御留居には水戸中納言様并に安藤對馬守様非常の警衛を命せられ△「万一野心の置あつて上様御留守の慮を窺ひ如何なる大事をなさんも知れずと晝夜分たぬ嚴重の見廻
 ○「此上の見廻うではムらぬか△「サ、お越し被成れ「ト橋掛へこ入る「石川「エツサツサ
 ○「ト向ふより長棒の駕を擔ぎ出て来り直ぐに舞臺へ来り「嬉しや支へる奴原を追退け漸々爰迄か供を○我君様に御安体なるか○「ト駕の戸を明け内に家光居る「ハッ君には御安体に渡らせ給ひしハッハア、家光「シテ此所は何國なるぞ石「ハッ最早追手御城門にムり升る家「スリヤ郭内へ参りしとぞ石「ハア、家「シテ供廻りは如何をせしぞ石「ハッ途中の危難長途の疲れに段々遅れ殊に拙者が足早故追附者も是なく千住宿より拙者一人か供致してムり升る家「シテ石橋驛よりの行程は何程あるや石「ハア二十六里餘りにムり升る家「ム、スリヤ纒の間に其方が石「ハッ既に今日石橋驛にて御一大事と聞くぞ齊しく近藤長坂水野を始め八十人にて御守護を申し揉み揉み途中古川繩手を始とし栗橋堤や其所此

所より埋伏勢顯れ出夫を防ぐ其爲に御近臣には散乱なし或は長途に疲れ果據なく千住宿より恐ろから御駕の棒鼻に大石を括附け某一人にて参りしが斯く御安着に相成しも日光尊靈の守らせ給ふ所無禮の段眞平御免遊ばされ升せう家「既に其方なかりせば予が命も危ふきに全く其方が蔭なるぞ石「コハ勿体なき御誼恐入り奉る家「シテ其方食事は如何致せしぞ石「ハツ夫にこそ今日石橋驛にてお先巡見に参る折酒屋何某が御社参の悦ひとて阿部川餅を出せしを網の袋に入置しが夫ぞ好き兵糧にて未だ空腹は覺へ升せぬ家「流石は心掛ある其方予は殆んど空腹に及びしが其の阿部川餅とやら申す物予に與へぬる石「ハツではムれ共餘り尾籠な家「イヤ左様でない其方が心を察し一言も申さざりしが實は空腹身に覺ゆるぞ一つ與へよ石「左様なれば〇ト「阿部川餅を出し」恐れながら家「チ、〇ト「喰ふ事あつて」八左「餘程好味を物じやな石「ハア、家「是にて飢を凌いだぞよ石「ハア、〇去ながら御城外へ参りし逆猶豫はならじ家「開門を申附よ石「ハア、御番衆「開門なられよト内にて」〇「無禮者めが勿体なくも將軍家の追手なるぞ△「殊に上様御留守中稻葉伊豫守爰を固る皆々開門杯とは思ひも寄らず石「アイヤ上様御歸城なれば開門あられよ開門「ト家根の上へ稻葉伊豫守近習八人上りて猶「ヤア將軍家の御名をのたり開門杯とは偽り者上様には今日宇都宮御泊りあるぞ早く爰を皆々立去りからう石「ヤア上様今日石橋驛より俄の御還御石川八左衛門守護致したり稻「誠に貴所は石川氏何故虚言を申さるゝぞ御大老附添ムれば火急の還御是あるにもせよ御先觸なうては叶はぬ石「夫と一應御尤にムれ共急變故にお供に先立御歸城に相成たり早く開門致されよ稻「如何程貴殿が申共上様か一人今頃には還御にならう筈もなし殊に開門は明六つが掟よし上様なれば逆天下の掟は背かれずト内へ入る石「スリヤ如何様に申ても皆々開門は相成らず石「斯る急變に何逆猶豫の相成らうや押破つても通つて見るわいエ、而倒なト駕の棒にて城門を突く内にて大勢狼藉者御油斷召るをト石川は突破り片扉へ手を掛け押明ける稻葉守諸士潜門より出て来りヤア憎き八左衛門御法を犯せし狼藉者ソレ者共」皆々寧ろの事にト鐵炮を向ける家「コリヤ伊豫扣へよ皆々何と家「夜中に開門致さぬは役目の表尤なるがコリヤ予であるぞ稻「誠に上様〇ハツハア、〇上様御還御とは思ひ設けず恐入り奉る家「委細の跡にて申聞んが急變に因り掃部が計らひ予を越中が体になし歸る途中附の者は伏勢の爲に散乱なせど万死の中に一生を得たるも則八左一人供をなしたる彼が働き稻「夫共存せず不禮の段々石「イ、ヤ夫もか留守を大切と思ふ故家「宥るすく稻「ハア、有難御仁惠去にても石川氏一人にて守護せしとは不思議の力量家「實に人間業とは思はれず石「偏よ君の御高運にて稻「目出度御歸城〇ソレ皆々還御ト内にて」皆々還御ト城門を開く内に侍大勢辞

儀をして居て「百泰平唱ふ君が代に 稻「礎堅き家」舞鶴城石「開く追手は 稻「武勇の動し
家「實に忠臣は〇「ト襟を突くのが木の頭」實じやなア「ト此仕組宜く烏笛時の太鼓にて
拍子幕

大 詰

役 人 替 名

- 一本多の室綾の戸
- 勘太夫下女お松
- 源四郎の伴音吉
- 福田有庵
- 一人見八太夫
- 岸本善次
- 西尾三十郎
- 川井佐之助
- 安藤左京亮重長
- 一本多上野介正純
- 一與四郎の母お柚
- 勘太夫女房お塚
- 源四郎妹お富
- 佐太郎妹お仲
- 丸川要造
- 高畑宇呂藏
- 篠塚角三
- 知喜村辨之進
- 鍛冶屋權兵衛
- 百姓太兵衛

- 一腰元お玉
- 一腰元お六
- 一河村鞆負末高
- 一腰元芳澤
- 一腰元幾野
- 一遠見侍兵吾
- 陸尺 四人
- 鎗持 一人
- 草履取 一人
- 家來 大勢
- 供廻 惣出
- 竹本連中

驛入口駕訴の場

本舞臺平舞臺上手橋の出し掛け向ふ川越しに町家の中遠見柳の立木松の釣枝都て宇都宮入
口の休爰に乗物を下し近習四人陸尺四人鎗持草履取供廻大勢立掛り下手に福田有庵お柚お
富抱子を抱き音吉を連れお仲權兵衛太兵衛居て宿場の騒唄よて慕明く大勢「ハイ」お願の
者でムり升る丸川「ヤ」駕訴杯とは天下の御法度「宇呂藏」殊も將軍家の御上使として本多家へ
罷越す角「安藤左京亮が通行を妨る條慮外千万知喜村」なせ領主へは願出ぬぞ「丸」下れく
四人「下り升せい有庵」御領主様にはお取上げがムり升せぬ故御上使と承り升ての推てのお願
ひ皆々「へいお願の者でムり升る」丸「ヤ」ならぬと申さば四人「下りからぬか」ト駕の戸
を明け安藤左京亮居て左京亮「ア、待て」四人「へい」左「承れば予を公儀の上使と存じて

願あるとは如何なる筋か左京亮承つて取すであらう丸「ではムリ升れと四人」駕訴の義は左、夫も承りし其上にて重長に所存あり○シテ何所の者なるぞ有「ハッ愚老事は福田有庵と申す當城下の所醫にて是なるは大工職人が身寄の者にムリ升る 左「其者共が願ひとは 有「失禮ながら御通行をお見受申て願出升たれば願書にも認めず直々申上る様にムリ升○か塚殿早うムラつしやれお松サアお神さんお出被成升せいなア「トいひながらお塚の手を引出て来る」左「シテ夫なる者は 有「ソレお塚殿様のお尋ねじや塚「ハイ」ト始終泣て居る」松是こしたりお神さん早ういふて敵を取てお貫ひ被成升せ私も早う與四郎さんの敵が取て貫ひ度悲い／＼／＼わいなア 左「見れば怒ひてものさへも能く申さぬは子細ぞあらん早く申せ／＼ 塚「申上るも涙の種か聞被成て被下升せ○私事は當御城下に住居致す大工棟梁勘太夫の妻塚と申升る者夫には先月廿一日御家老河村様より御普請に附招かれ升て連れて參つた子分廿八人は是に居升るは其身寄の者でム升るが夫切り歸り升せぬので伺ひに出升た所普請中は留置進對面もお許しおいは不思議な事と存じており升たが一昨日の明方に引取に參れどのお達し故參つて見れば一統に首のさい死骸斗り有 夫が合點が參り升せぬじや斯う申す愚老めは勘太夫と入魂故一統の物代でお役所へ出て何の罪で首斬たかと尋ね升た所お金藏の金子を取た盜賊故皆刑罪に行ふたとの權柄押し○所が勘太夫は夫は／＼物堅い男に

て夫に使はるゝ子分の者に盜心は一人もムリ升せぬ取分此考母の忤與四郎は正直者で親孝行此宇都宮切ての評判者夫迄首を切られ升た 仙「夫も此身の病氣を案じ先おとゝいの夜戻つてから此御普請出來上れば御褒美として侍に取立られる約束故悦んでくれとて立歸つたが長の別れ老年寄つて只一人の子を殺され此後何と致し升せうぞいなア 眞「私の兄さん源四郎さんも去年の秋に此子を置いて女房さんが死なしやんしたのに又々今度殺され升ては跡よ残つた此乳香子私しや何とせうぞいなア○チ、泣きやんな／＼○兄さんの事を虫が知らすの此マア泣く事こいなア○ハイ是が殺され升た源四郎が子でムリ升る○又是は其兄の音吉でム升る音吉「チイ姉ちやんが死たら明日うら飯がたべられねへなア 仲「チ、音さん道理じやわいなア私の兄さん佐五郎さんでも残つて居たなら又力にもならうもの 權兵衛「私が甥の万吉にも 太兵衛「又弟迄夢見る様な 權「本「今度の死様 松「人之切れて死なうとも私しや堪へて居るけれど只悲いは與四郎さん戀も叶はず殺されては給金お構ひなしで勤めた私しや甲斐があいわいなア／＼ 塚「其弟子迄廿九人 有「切も切たじや皆々ムリ升せぬか 左「フム聞ば聞く程哀れを話し 有「賊なら賊で吟味の上御成敗なら諦め様もムリ升せうが 塚「何の御沙汰もムリ升せいで 仙「御成敗被成升たは餘りむごい御領主様 塚「其お糺しをお殿様 有「お慈悲を以てなし被下升る様 皆「お願申上る 左「予も台命を奉じ罷越せしは夫等の

義を取糺さん爲○イヤサ只今の願の義は某好きに計らひ得させば宿所へ引取り沙汰を相待
 塚「スリヤお願を皆々お聞届け被下升るか 左「如何にも○死骸と懇ろに葬り得させよ皆々
 有難うムリ升る「ト大勢は橋掛へこ入る」左「井伊殿より承りし工みも是にて荒増は四人何
 と御意被成升る 左「アイヤ○「ト乗物よ乗るのが道具替りの知らせ」乗物やれ皆々「ハア、
 「ト此模様宜く行列三重にて道具ふん廻す

宇都宮城内の場 其一

本舞臺三間の間塗框此上本懸見附佛壇是に阿彌陀の掛物東照宮并に本多佐渡守の大位牌本
 多家一統の位牌前側塗骨障子の観音開き左右瓦燈窓欄間に横額橋掛戸家口共金襴蒲縁を敷
 詰部て本多家佛間の体爰に腰元四人居て琴唄にて道具納る

ふ玉「何と皆さん合點の行ぬ事ではムリ升せぬか」さ「さいあア折角新御殿も出来上りしに上
 様に御母公の御連例とて石橋宿より俄の御歸城芳澤夫故日光への御代參は板倉内膳正様
 にて當城へお泊りもさくお上に於ての臨御残念にムリ升せう幾野夫れよ附て心得ぬは一昨
 日上様が俄にお歸りになりしと聞くより御家中俄るに騒ぎ立今に於て静まらぬ何うした
 事でムリ升せう玉「サア合點の行ぬといふこと其事でムリ升る河村様のお下知として皆小具
 足に身を固め武器の御用意遊ばす何共合點の行ぬ事ではムリ升ぬか三人「左様でムリ升る

わいなア「ト橋掛より綾の戸出て來り」綾の戸「是はしたり腰元共御前近う静まらぬか四人
 貴婦は奥様○「ハア、綾「只さへ心も心ならぬに我夫にと今朝未明是なる佛間よお籠ありし
 はお勤とは思へ共只ならぬ昨今の御血色夫が心に掛る故お伺申さんと参りし所今の取沙汰
 以來は屹度たしなみ升せうぞ 玉「庵相の段幾重にも 六「御免被成て四人被下升せう 綾「今
 日こそ差宥せば皆部家へ下り升せう四人「ハア、「ト橋掛へこ入る 綾「女子供といふ者は口善
 悪ないものじやなア「「淨る跡には一人結ばれし心も解ぬ綾の戸が家中の嚮手廻りの腰元
 はしたか取沙汰も胸に當りの夫の手前聲洩さじと獨言「見るに附け聞くに附け心に掛る事
 斗り若しや天下に何事が出来しての事ではないか何に附てもお案じ申は我夫の今日の御様
 子「レ御機嫌を伺ひ升せうか○「淨「レ御機嫌を伺何氣なく佛間の障子押開けバト段の中
 央には館の主じ本多上野必死の儀式三方四方並居る諸士が長柄の銚子逆に廻らす最期の盃
 夫と見るより「ヤコリヤ我夫には「淨「驚く妻を本多制して本多「コリヤ綾の戸何驚く事があ
 る武士たる者の一命を塵芥に比し名を磐石の重しとする事其方にも存じかる筈 綾「サア夫
 知らぬでもムリ升せぬと川井「ア、イヤ奥方殿へは我々お誂め申せしものと西尾「止を得ざる君
 のお覺悟岸本「就ては我々討人を引受け人見死出の御供四人致す心底 綾「とは又何故 淨「不
 審彌増詞に正純 本「子細と申は外からず隠謀露顯致せし故 綾「何とかつしやる 本「コリヤ

能く承れ○當家は神君を取立の家なれば將軍家は主君たり我恩義の爲に其相傳の主君を害し駿河公を四代の君よかし奉らんと企し身の大望は私慾よわらず然るに鈞天井を以て素志を遂んと待設けたる一昨日將軍俄の御歸城は隠謀露顯に相違きし左すれば討人の向ふは必定左もなき内に深く切腹なさんと用意せしも兼て覺悟の上なれば必らず歎くな驚くを海一始めて明と正純が決死の詞聞く悲しさ綾「スリヤ我夫には夫故に空恐い御謀叛を川」夫と申も我君には義を重んじ給ひしも岸「時到来らずして四人」斯の仕合はせ綾「スリヤ左程迄我夫には本」君の爲には家をも身をも何か厭はし海「一心變せぬ正純が詞洩聞く河村鞆負一間の内を罷出河村」仰せの如くか家も最早今日限り嘸かし君には御本望よムり升せう海「ムズと座したる河村を上野介打見やり本」其方は河村鞆負四人」御老人でムつたか河「其老人にも久し振にて小具足を肌に着今にも討人來りおは長生致した一徳にて死花が咲といふもの海「傍若無人の詞村が詞を綾の戸間兼て綾「コレ河村當家の臣下多しと雖もそもは比類なき功臣にて然も神君より御紋所を拜領ありし當家の老臣隨一よて忠義無二の者なりとて舅君にも細々と御遺言ありし由左すれば君に御不了簡のある時はお諫め申さしやならぬ善夫に何ぞや面白ろうに長生の徳死花とは主人の最期が本望にて家斷絶が満足かそもとは物に狂ひしか但しは老耄しやつたか海「膝突掛て責問へば河村涙をばらくと流し河

コワ奥様のお詞とも覺へず年老たれど狂氣老耄仕らず抑も此度の御謀叛を思ひ立れし最初御諫言を申し上げしかと元より武士の義を思ひ企給ひし御謀叛なれば諫むるにも諫め兼お家を目前失ふ事は存じながら御同意申せし河村鞆負が心中は如何斗りにムらうぞ今日斯の仕合と相成りしも元より覺悟の上なれば奥方にも是迄と思諦の被下升せう海「思入たる河村が詞に綾の戸涙ながら綾「如何に武士の習ひじやとて邪と非道の御謀叛に御身を捨て御先祖代々御位牌迄も穢し給ふはお情ない事して被下升たな海「夫を思ふ綾の戸があやも涙に暮けれど上野介見向もせず本「ヤア忠孝両ながら全きは昔しよりなし難し不孝と知つて家を捨不道と知つて君を弑すも忠義の爲には代へ難し斯なり果るは覺悟じやわい綾「サアお覺悟でもムり升せうが連添ふ妻の綾の戸さへ存せぬ程の事なれば餘もや將軍家へ此事の聞へしとも思はれず左もかき内に御生密とは君の御短慮せめて暫しのお命なり共本「ヤア死すべき時に死せざれば死に増る耻あり鞆負介錯中附るぞ海「と三方に手を掛れば河「ア、イヤ我君お待被下今にも討人來りおは此親仁が手並を見知らせ一泡吹かして死出の御供仕らんと相待ども今よ何の沙汰なきは品に因らば奥方の仰せの如く將軍家石橋宿より引返せしは全く御母公御遺例に附還御ならせられたものでハムるまいの海「半信半疑の河村が詞に諸士も小首を傾け川「何様左様かも斗られず左をくば討人の向ふべき善人「其義のな

きはコリヤ全く露顯に附ての四人「義ではムリ升まい 河「左すれば御最期を早まり給ふ所に
 あらず密よ江戸表へ間者を遣え置たれば世の動靜を窺ひ給へ 淨「死を止むれば莞爾と打笑
 み 木「河村程の者なれ共年老ぬれば女子に齊しく未練な事を申もの哉た供の中への智者と
 聞へし松平伊豆守井伊掃部頭のあるを知らずや御母公病氣と披露せし我に油斷をさせん
 ず謀計油斷なして不覺を取らば未代迄の耻辱ならずや 河「仰せ御尤にはムれ共死は一旦に
 してなし易く生は得難し 河「假令討人向へば速 西「花々しく一戦遂げ 岸「主從討死仕れば
 人「死遅れにも候まじ 河「只々暫しの御存命五人願はしう存じ升る 綾「河村始め皆の者迄
 強てお止め申升れば又の御思案遊ばし升せ 木「ヤア此期に及んで本多正純元より將軍家に
 恨みあつて隠謀企てしものならねば討人を待て何かせん一死の外に何ぞ思案のあるべきか
 綾「スリヤ我夫にはお聞入れなく 河「死を先んじ皆々給ふよな綾「河村殿河「奥方皆々ハア、
 淨「主從目と目見合す斗り詞も涙催す折柄遠見の侍走り出て兵音ハッ只今將軍家よりの御
 上使として安藤對馬守殿の息左京亮殿の御同勢相見へひ間御注進申上げ奉り升る 河「ンテ
 其跡に續きし諸侯は 兵「ハッ只一方の人数にて皆平服にムり升る 河「引返しては入る 河「
 合點の行ぬ今の知らせ此度の義に附てならば城受取の諸大名隨行を致す筈 綾「夫に左京亮
 殿の同勢のみとは 河「コリヤ彌露顯にあらす 西「餘事に附ての上使ならん岸「最早我君人」

御最期の義は四人「お止り遊ばされ升せう 淨「申述べば正純も心中に疑ひ生じ暫く思案にく
 れたりしが何思ひけん心にうなづき 木「所詮免るゝ我罪ならねば上使に逢ふも面倒なれど
 外ならぬ左京亮と逢はで叶はぬ情の返禮皆々エ、 木「イヤ何事にもせよ上使とあらば出
 迎ひ致せ予も衣服を改めて對面を致せ共病氣と披露致して置きやれ 河「アイヤ我君何分斯
 る折柄なれば御對面は宜しかるまじ諸事は河村鞆負殿へ四人「お任あられ升せう 木「必ず共
 に鹿畧と致すを彼は誠の武士なるぞ皆々「ハア、ト戸家の内にて「呼御上の使お入 木「アリ
 ヤ上使入來の知らせ 綾「善か悪かは知らね共 木「何れ免れぬ 綾「エ、 木「出迎ひ致せ四人「
 ハッ 淨「待間遅しと 河「此模様宜く三重にて道具ふん廻す

宇都宮城内の場 其二

本舞臺半舞臺一面に金襴大欄間橋掛戸家口共杉戸都て宇都宮城内白書院の体床の淨るり送
 りにて道其納る

淨るり「請じける上使の席は黑白を分つ設けの白書院暗き罪科の身を照す銀燭の火は輝けど
 武威衰へし本多の城内靜り返つて見へたるは公儀の威光を格別なり 河「此内近習銀燭を持
 出て來り上下に置いて入る 淨「制蹕の聲諸共に入來る上使は左京亮疊さはりもしとやゝに
 作法亂さぬ折目高左京亮將軍家よりの上使として安藤左京亮重長只今參着致したり出迎の

者ムらぬは上へ對して不敬ならずや 淨「高らかに呼ばれば 河「アイヤ御上使へのお出迎ひ仕るでムり升せう」 淨「いひつゝ、老臣河村鞆負服改る間もあく心せはしく出迎へ」是はく御上使にはお役目御苦勞お出迎も仕るべきの所思ひ設けぬ義にムれば失禮御免被下升せう 左「何様俄の事なれば不禮は敢て咎めぬ共見れば上使の出迎ひに小手脚當をしられしは 河「ヤ 左「當家の家風なるか 河「如何にも治に居て亂を忘れぬ則本多の家風でムる 左「ンテ其方は 河「當家の老臣河村鞆負と申者イザお通り被下升せう 左「役目されば通るであらう 淨「目離しもせず鞆負の舉動窺ひく座に通れば此方も心離さぬ河村 河「ンテ御上使の趣きは如何ある義にて候や 左「上意の義は當城の主は本多上野介殿に對面の上ならでは 河「主人上野介義不快にムれば何卒河村鞆負迄迎聞られ被下様押して願奉り升る 左「病氣とあらば是非もなし其方何事に寄らず返答を致すじや迄 河「御念に及ばぬ一心にてお請仕るでムり升せう 淨「答ふる彼方に降あつて本多「アイヤ當家の主は本多正純病を推して御上使へ御面會を致とでムらう」 淨「いひつゝ本多上野介跡に隨ふ諸士の面々禮儀亂さず立出て」是はく左京亮殿遠路の所お役目御苦勞拙者病氣に罷在り失禮御免被下れし 左「御丁寧ある御挨拶左京亮痛み入り申 本「ンテ御上意の趣はさ 左「上意の趣謹で承りられよ」 〇此度家光公御社參の筈の所御母公の御違例に付俄に還御相成りしが承れば御當家よは君を請ひ奉る爲新御

殿を設けられし由」 〇其義を君には聞し召れ外あらぬ本多が物好き其方參つて見分せよと君の上意を承り罷越したる左京亮 本「ス、ヤ將軍家の上意といふは 河「新御殿の御見分とは 左「如何にも見事な御普請でムらう 淨「針を呑みし安藤が詞に胸は涙打つ河村 河「イヤく本の假家同然其義は平に御用捨をば 左「イヤ見事の普請でなくば此書附は取らそまじ 淨「いひつゝ取出す一書を心鞆負が前に差置けば訝かしながら手に取上げ見れば覺への我墨附 河「ヤ是は 左「夫ぞ大工與四郎へ遣りせし褒美の書附 河「ヤ 左「夫ある書附は其方の計ひにて本多殿よは御存じないか」 〇コリヤ能く考へ見よ上野介殿御存じあらば其墨附を其方の名前を以て遣はさぬ筈鹿相を申さば爲にはならぬぞ 淨「物によろへて言論せば河村情の心を察し 河「仰せの如く新御殿の普請は鞆負めが一存の計らひ上野介は存せぬ事にムり升る 左「コリヤさうなくては叶はぬ事じや」 〇然るに大工廿九人を切捨しは何故なるぞ 河「ヤ、其義を何うして御上使には 左「先刻是へ參る途中訴へを承れば右の者共を盜賊として一々首を刎たる由 河「如何にも賊の成敗に首を刎たる大工一統 左「何故吟味をなさりしぞ 河「ヤ 左「夫も其方一存の計ひか 河「御意の通りにムり升る 左「よ、其詞を承れば最早此座に用事なし其他の者も遠慮致せ 河「何我々に四人遠慮せよとは 左「少と密々にて正純殿へ申入度一義のあれば 河「何かは存せず君のお傍はいつかな退ぬ河村鞆負 本「コリヤ御上使

の仰でないか 河「ではムれ共 本「ハテ參れと申に 河「ハア、左「ア、コリヤ鞆負其方は何歳なるぞ 河「當年七十二歳に相成升る 左「モウ死でも宜い年じやあ 河「エ、左「是は大に施相申た 河「百に成ても死度ムらぬ 淨「心有氣な一言に此方も胸の一思案打連れてころ入にけり跡見送りて本多正純 本「ソテ密事の用談とは何事にムるな 左「貴殿には將軍家の今こそ臣下に立歸れど元は駿河公の御附人定めて忠長公を御大切に思はれ申さん 本「コハ異か事のお尋ねかな此君を御大切と思へばこり何卒して今一度御世に出し度存すれ共所詮叶ぬ今日の成行貴殿が戸田川の御厚志斗りは死す共正純忘却は仕るまじ 左「其御心底のあるなれと何うか某に被下まいか 本「正純か身に叶ひし事なれば情に報ふ拙者の返禮何なり共仰せ被下 左「然らば河村鞆負が申受けたい 本「七十二歳の老人が何の御用に相立て望み召るぞ 左「然も主人の用に立正純殿の身代に 本「ヤ、川「サ致さん爲の拙者が所存實は當所盤谷村名主藤左衛門の密訴に因て貴殿の隠謀忽殿致せしも今の愚附より事起り已に討人を差向んどの評定なりしを某望んで上使に立しは必定駿河公の御爲に致せし事に相違なし御自分を罪に落さば駿河公にも連累の科は免れぬ謀判の根本其處を存じて河村鞆負に掛けたる謎の解けもせば駿河公にも凶事なく當家も無事に治る道理御所望申は爰でムる 淨「事を譯たる重長が詞に正純涙を浮め 本「毎度の御厚志忝なし其御心底を聞く上は包み難き拙者

が隠謀如何よして駿河公を御世に出し奉らんと老臣河村鞆負と謀り釣天井の仕掛を以て恐多くも家光公を弑せんと工のし事己に露顯の其日より討人を待たで切腹と存せし所上使に立れしは其許なりと承り死を止まつて御意得しは去年受けたる情に代へ貴殿の繩に掛らん心底然るに又も再度の御厚志忝けれと鞆負には父が紀念の功臣なれば無道の汚名は負はし難し何卒我を江戸へ召連れ御邊の手柄を致されよ 淨「義を金鉄の正純が覺悟に重長當惑なし 左「左る仰せも理りなれど夫では徳川家の忠臣とたへられたる本多家一門公儀迄の耻辱ではムらぬか 本「元より公儀へ對しては不忠不義の上野介何を罪科の免るべき 左「スリヤ何うあつても其許には 本「賞罰正しからざれば天下の政道相立まじ 淨「苦痛を堪へ正純が理非明白に述べければ安藤は祭しやり 左「此上は力なし兎も角も貴殿の仰せに 本「イヤ江戸表へお引下され 淨「心變せぬ 下「此仕組宜く三重にて道具ふん廻す

新御殿釣天井の場

本舞臺三間の間高二重本松附檜皮葺の家根欄間見附金襴後より大石を乗せし天井落る仕掛あり上下綱代拵是も碎けて向ふ奥庭の遠見になる謎らへあり柴垣紅葉の立木同じく釣枝都て新御殿の休爰に河村綾の戸居て床の上るりにて道具納る

淨るり「忠義に凝たる河村鞆負朱に染たる有様に綾の戸の立寄て綾の戸「コリヤ何故の此生害

河「いふに鞞負は息つき敢ず河村此河村が切腹は廻る悪事の皆天罰 綾「何といやる 河「恐
 多くも將軍を弑せん爲の此御殿釣天井又は盤石を仕掛け塵にせん企も安藤殿の手に入りし
 惡附よりして露顯なせしは是天罰元より斯く成り果るは覺悟され共お家の滅亡歎はしく存
 せし所安藤殿の情に依り罪科を此身に引受けなばお家の立ざる事もなき様餘所ながらの
 論しに切腹なせしは大工共へ身の言譯と二つには本多の家名を立る切腹 綾「スリヤ我夫に
 代つて最期を遂げしよな 河「始めて知つたる精神を胸に響るも涙なり河村鞞負居直て河「
 天命盡し謀叛の棟梁河村鞞負末高が最期を御上使お見届け殿下升せう 河「と河村が苦痛
 屈せぬ聲高らか一間の内より左京亮手舁にさせし乗物と共に立出一桁 左京亮「スリヤ鞞負に
 の我詞を頼みに切腹遂げたるか 河「詞に駕の内よりも本多何鞞負には切腹せしとな 河「戸
 を押明れば本多正純腹一文字に切たる有様左「ヤコリヤ何時の間にやら本多殿にも綾御切
 腹を遊ばせしか 河「スリヤ我君にも御生害とな 本「せめては汝が一命を助けんと思ひし故
 河「君に代りし切腹も綾「今は甲斐かき御身の成行 本「是も君を殺さんと 河「謀りし悪事
 の皆報ひ 左「御運目出度御危難を本「免れ給ひし皆々御高運 左「シテ釣天井とは 河「まつ
 此の如く「ト釣天井を落す 河「恐ろしかりける「ト此仕組宜く三重にて拍子幕

演劇 宇都宮株木建設 大尾
 脚本

明治廿七年四月十日印刷

明治廿七年四月十七日發行

(定價金拾錢)

大阪市東區備後町四丁目四十番屋敷

著作者

勝彦兵衛

京都市上京區葎屋町上長者町上ル
 南儀町四番戸

版權所有者
 兼發行者

新實八郎兵衛

大阪市東區内本町橋詰町六十八番屋敷
 周擴社

印刷者

前田菊松

版權及發行
 權與所有





Faint, illegible text scattered across the right side of the page, possibly bleed-through from the reverse side.

[Redacted]

特 5 1

657

宇都宮株木建設

国立国会図書館

088412-000-7

特51-657

宇都宮株木建設

勝 諺蔵 / 著

M27

DBJ-0038

